

ゲンソウロンパ

こえ

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

突如として始まる命を懸けた極限のゲーム。

18人の少女は真相を掴むことが出来るのか。

真相は一体何を意味するのか。

この作品は東方project及びダンガンロンパの二次創作小説です。

それぞれのゲームをプレイし、世界観を掴んだ上でこの小説を読むことを強く推奨します。

また、貴方の好きなキャラが死亡する可能性があります。許容できる方だけお読みく

ださるようお願いします。

私事になりますが、この作品が処女作なので温かい目で見てもらえると非常に嬉しい限りです。

なので、おかしな点等がありましたらご指導ご鞭撻のほどををよろしくお願いいたします。

目次

邂逅

始まりはいつだって突然で忽然で必然

策動

スイミン・エクस्प्रेस

84 思慮の渦、疑惑の波、推測の岸

存在した幻想の秩序

10 1

探索

仄暗い廊下の奥に

21

秘密の崩壊

31

折れた三本の矢

42

四人寄れば最高の知恵

57

真贋見抜く心眼

63

未知なるルナティックウエポン

73

見えない暁

111

響かせ幸運、浴びせる咆哮

125

枯葉動乱

141

人妖方程式

155

サラシモノ

167

邂逅

始まりはいつだって突然で忽然で必然

「ん、起きたか。立てるか？」

目を覚ますと魔法使いのような帽子を被った金髪の少女が私に手を差し伸べていた。私と同じくらい歳の年齢だろうか。

どうやら私は眠っていたみたいだ。硬い床で寝ていたせいか、身体が少し痛い。

「大丈夫、一人で立てるわ」

差し出された手を借りず、私は自力で立った。

「そうか、ならいいんだ」

金髪の少女は手を引いた。

立ったついでにふと辺りを見回す。どうやら私がいるのは体育館らしく、ステージもある。ただ、私にこの体育館の見覚えはない。ステージがあるということは学校だろうか。

そして一番気になることは、私と先ほどの金髪の少女を含め18人の、私と同じくらいの年齢の少女がいる。それも全員同じ服、薄紫色のリボンがあしらわれた半袖の薄い生地、所謂「夏服」と呼ばれるセーラー服を着ている。先ほどの金髪の少女も、そして私も。私たちの履いているスカートは紺色で、膝にギリギリかかる程度の丈の長さだ。

「なあ、お前も何でここにいるか分からないか？」

私が見回してる中、先ほどの金髪の少女が話しかけてきた。

「ええ、そもそもここがどこなのかも分からないわ」

私は思った通り、感じた通りに答えた。

「やっぱりそうか……お前もか。これでここに全員が記憶が欠如してる事が分かったな。」

ため息交じりに目の前の金髪の少女はほやいた。

いや、私はこの人物を知っている。「金髪の少女」という呼称でなく、私はこの人物の名前を知っている。

「欠如？喪失じゃないの、魔理沙？」

息を吐くように、自然に目の前の少女の名前が私の口から飛び出した、「魔理沙」と。

しかし、私には目の前の少女の名前を間違っていない自信があった、「霧^{きり}雨^{さめ}魔理沙^{まりさ}」で

あると。

恐らく「魔理沙」であろう少女は、少し驚愕の表情を見せたがすぐにその表情は消えた。

「やっぱりお前もか……霊夢。合ってるよな？お前の名前は『博麗^{はくれいれいむ}霊夢』だろ？」

驚くことに魔理沙も、私の名前を知っていた。私は驚愕の表情を隠せなかった。

「その反応は正解だな、もう17回目だから分かるぜ」

魔理沙は当然、といった顔もちで言った。

「ついでに教えてやる。ここにいる全員がお互いの名前を知ってる。だけど、それ以上のことは知らない。私も、そしてお前も。そうだな？」

ニヤリと笑って私に訊いてきた。

その言葉を聞いて、私は再び辺りを見回してみる。

最初は皆全員知らない人だと思っていた、がそう言われるとこの人達を私は全員知っている。

あのウェーブのかかった黒髪ショートヘアの少女の名前は「村紗^{むらさみなみつ}水蜜」だ。妙にセーラー服が似合ってる。この18人の中で一番セーラー服を着ていることに違和感を感じないのは彼女だ。

ムスっとした表情の青い髪のロングヘアーの少女の名前は確か「比那^{ひな}名居^{なゐ}天子^{てんし}」だ。

見たところ、かなり不機嫌な様子だ。ファーストインプレッションでは、彼女はかなり我侷そうだ。

他の人たちの名前も全員分かる。そして、その名前に自信がある。しかし、やはりそれ以上のことは分からない。相手の人がどのような性格で、どのくらいの年齢で、私とどんな関係だったか、それらのことは全く分からない。

私自身の心中で全員の名前を確認した後、魔理沙の質問に答えた。

「え、ええ……そうね。全員の名前は記憶にある。魔理沙の言う通り、それ以上のことはさっぱり」

「ちなみに、他のことは何か覚えてるか？例えば、ここから脱出する方法とか」

記憶を掘り返してみる。しかし、全く思い出せない。頭の中に靄もやがかかっているようだ。

「悪いけど、全然思い出せないわ」

魔理沙が落胆して言った。

「やっぱりかー。そりゃそうか、お前だけ何か覚えてるってワケないよなあ」

ふと、少し遠くを見ると、赤いショートヘアの少女と青いメツシユの入った銀髪の口の少女が話しているのが見えた。

確か、赤いショートヘアの方は「堀川雷鼓ほりかわらいこ」、銀髪の方は「上白沢慧音かみしらさわけいね」だ。

「あらら。これで手がかりがついに0になったわね」

「確かにな。あの扉も開かない。私たちをここに集めて何をしたいんだろうな？」

慧音が言っていた「あの扉」を探すのに、私はキョロキョロ体育館を見回す。すぐに、雷鼓と慧音の向こう側に大きな扉が見えた。

その扉をじつと見つめていると、魔理沙が言ってきた。

「霊夢、あつちの扉じゃないぜ。あれは調べたら用具やら何やらが収納してあった。あいつらが言ってるのはお前の後ろのだけだ。」

言われて、私は振り返ってみる。すると、先ほどの扉と似たような形状の扉があった。「あれが多分ここの出口だ。だけど、どう頑張っても開かないんだ。鍵もないみたいだしな」

歯痒そうに魔理沙が言った。

それに対して、私はふうん、と味気のない相槌しか打てなかった。何故なら、それよりも気になることがあったからだ。

ステージ。

用具の収納されているという部屋の扉の近くにあるステージは、私は怪しいと睨んでいた。何がどう怪しいというわけではない。ただ、本能的に怪しいと感じているだけだ。というより、「怪しい」というより「妖しい」のだ。あそこから何か気味の悪いモノ

を感じるのだ。

まじまじとステージばかり見ている私に疑問を抱いたのか、魔理沙が心配してきた。「おい、霊夢。ずっとステージなんか見てどうした？」

「さすがね。やっぱり一味違うわね、霊夢」

魔理沙が私に問った直後、気味の悪い裂け目が急にステージに出現して、そこから「妖しく」、「怪しい」声が聞こえた。

突然、ステージ上から聞こえた声に体育館にいた全員が反応して、声の方向に視線を向ける。

気味の悪い裂け目から再び声が聞こえる。

「全員起きたみたいね。……うん、いい面子を揃えたわね、藍は」

「な……何だあれ!? なんであそこから声が聞こえるんだ!？」

魔理沙はその異常な光景に驚くしかなかったようだ。私も驚いていなかったわけではない。しかし、魔理沙ほどは驚かなかった。何故なら、私にはあの裂け目には既視感を感じていたからだ。もしかしたら、欠如している記憶の中にあの裂け目が関係しているのかもしれない、と直感した。

私たち全員が声に驚いて動けなくなっていると、裂け目から金髪の女の人が出現した。一つの物音立てずに、気味が悪くなるほどスムーズに裂け目から現れたのだ。

そのあまりの異様な状況に、全員の驚きはより深くなった。

私が魔理沙の方をちらりと見ると、魔理沙は驚きのあまり、目を見開き、口を半開きにしていた。

裂け目から出てきた女の人は、一度私たち全員の顔色を窺った後、静かにステージ上のマイクスタンドのマイクに向かって口を開いた。

「皆良い顔ねえ。どうなるか楽しみだわ」

すると、その言葉に水色の髪に青色のリボンをした小さな身長少女、「チルノ」が反応した。

「お前、あたいたちをこんな所に閉じ込めて何をするつもりだ！ 早くここから出せ！」
「威勢が良いわね。そういう奴こそ、一番最初に死んじやったりするのよねえ。」

「……死ぬ？死ぬってどういうことだ！ あたいたちに何するつもりだよ!!」

チルノの激昂を見ながら、ステージ上の女の人は気味悪く「やにやしなながら

「このゲームが終わった後にその声が聞くことが出来るでしょうか。ふふ、楽しみねえ」と皮肉らしく呟いた。

あまりに命を軽視している発言に、チルノは言葉を返せなかった。それどころか、私もあまりの非人道的な発言に驚きを深めざるを得なかった。

魔理沙の様子が気になったので、横を見ると魔理沙がこちらを見ていた。すると、私に心配そうに問いかけてきた。

「なあ、どういうことなんだ？ 一体、私たちこれからどうなるんだ？」

「それは私にも分からないわ。あの女の話聞くしか、今出来ることは無いと思うわ」
「そうか……そうだな。よくお前そんな冷静でいられるな」

「あの女の口ぶりから察するに、私たち全員の命はあの女の手にあるらしいわ。だか

「らこそ、ここで変な気を起こさずに冷静になるべきよ」

私の答えを聞いて、魔理沙は少し考え込んだ。そしてその後、笑顔を浮かべた。

「確かにな。お前は頼りがいがありそうなヤツだぜ」

「褒めるのはここを脱出してからにしてよね」

「さて、横槍を入れるようで悪いけど、そろそろ貴方たちに状況を説明させてもらえる？」

ステージ上の女がニコニコと笑顔を崩さずに、私たちに聞いてきた。それに対して、魔理沙が「いいぜ、聞いてやるよ。話次第じゃあ、怒るけどな」と調子良く答えた。

魔理沙の軽快な返答を見て、私はひとまず安心した。しかし、ステージ上の女はこれまで以上に妖しく、奇妙に、微笑んだ。

「その威勢の良さ、保っていられるかしら？」

存在した幻想の秩序

「さつき霊夢が言つてたわよね。『私たち全員の命はあの女的手中にある』つて」

左手で金色の髪を静かにかき上げながら、女は言つた。質問の応答代わりに、私は首を一回浅く縦に振つた。

「そう、その通り。確かに、貴方たちの命は今、危機に瀕している。けれども、私の手中にあるわけじゃないのです」

理解が追いつかない。しかし、女は話し続ける。

「ここに貴方たちを連れて来て、閉じ込めたのも私の仕業。記憶が殆ど残つてないのも私の仕業。だけどね、貴方たちの運命を握つてるのは私じゃない。貴方たち自身なので」

「ここまで聞いても、まだ理解しきれない。

今までのおかしいことは全部あの女のせいなのに、私たちの運命を握つてるのは私たち自身？ こんなことまでのことができる人物が、何故私たちを泳がせるのか。そもそも、記憶を欠落させるなんてどうすれば出来るのか、全く分からない。

何にせよ、分かることは「あの女は只者ではない」ということだけだ。

「おい、お前。何言ってるんだ？ もっと分かりやすく言わなきゃ伝わらないぞ？」
生意気に、ステージ上の女に負けないほどにニヤニヤしながら「鬼人正邪きじんせいじや」が嘯み付いた。

尚も、女の顔からは依然として不気味な笑顔が消えない。

「あら、まだ分からない？ ならもっと平たく言っただけですわ。貴方たちには——」
一瞬、体育館から一切の音が消え去った。恐らく、ほんの一秒もかかってない間だったはずだが、私には何故かそれが長く感じられた。

ついに、女は口を開いた。

「殺し合ってもらいますわ」

時が止まった。あまりに唐突で残忍すぎる言葉だった。

私も、魔理沙も、先ほどまでステージ上の女に嘯み付いていたチルノや正邪も、その言葉に動けなかった。

女の声が体育館中を反響し、完全にその声が消えた後に残ったのは長い、長い沈黙だった。痛いほどの沈黙だった。あまりに、あまりに、長く感じられた。

その沈黙を破ったのは、魔理沙に近くにいた、金髪に黒髪交じりのショートヘア、そ

れに蓮のような物があしらわれた飾りを乗せている「寅丸星」とらまるしようだった。

「今のは冗談ですよ。有り得ないですよ、殺し合いなんで」

焦りながら確認してきた星に対して、ステージ上の女は意味あり気な笑みを返す。

「いいえ、本当よ。貴方たちにはしつかりと殺し合ってもらいますわ。」

「おい、ふざけるなよ！ そんなの私たちに何のメリットもないじゃないか!! 誰か殺したらここから出られても何にも嬉しくないぜ！」

「いつ私が、『誰かを殺したらここから出られる』って言ったかしら？」

魔理沙の言葉の数瞬間後、またしても衝撃的な言葉が発せられた。

「な……い……おい、まさか全員殺せつて言うのかよ！」 魔理沙は驚きすぎて、声が少し返っていた。

女はその様子を見下ろしながら、静かに語り始めた。

「いいえ、そうでもない。……この殺し合いは、言わば『ゲーム』。そして、『ゲーム』には守らなくてはならない『ルール』がある。この殺し合いは、決してルール無用のサバイバルなモノじゃない。この殺し合いは、貴方たちの各々が『ルール』に乗っ取り、私と貴方たちのどっちが勝つかを決める。つまり、この殺し合いは『勝負』なのです」

にわかに信じ難かった。今まで以上に、言っている意味が理解できなかつた。

『殺し合い』が『ゲーム』であり『勝負』？あの女は、人の命を何だと思っているのだ。あの女は本当に『人間』か？そんな疑問を抱かざるを得ないほどに、命を軽く、そして薄く見ている。

「ということは、貴方も私たちと一緒に殺し合いをするのね？ そうなら、真つ先に貴方を殺して差し上げますわ」

銀髪の、先端に緑色のリボンの付いた揉みあげを結っている「十六夜咲夜」が、軽口をたたくようにステージ上の女にそう言った。

「いいえ。私は参加しない。参加したら、標的は私以外に考えられないでしょうから」
「あら？ それじゃあ、私たちと貴方との勝負を付けるのは出来ないんじゃないやなくて？」

「それに関しては、今からするルールの説明を聞いてもらえるかしら？ そうすれば、貴方たちが本当に戦うべき存在がはつきりするわ」すまし顔で、女は言い放つた。

私は、どうしても女に言いたいことがある。言わなければ、気が済まない。

そう思つて、私は思いつき息を吸う。そして、声に出す。

「私は——」

「私はどんな結果になつてもこんな目に合わせたお前を絶対許さない。このゲームに勝つて、お前を叩きのめしてやる」

私と魔理沙の発言が重なった。正確には、私が発言しようとした瞬間に、魔理沙が話し始めたため、私が話すの止めざるを得なかった、と表現する方が正しい。

しかし、魔理沙は私の言いたいことを全て代弁してくれた。だから、私も話すのを止めた。

私は、思わず笑みが零れてしまった。この極限の状況にも一筋の光が射した、と感じられた。

私たちのその様子を見ても、女はただ笑顔を浮かべてるだけだった。一体、いつあの女の笑顔が消えるのだろうか。

「ええ、貴方たちもようやくこの殺し合いを『ゲーム』だって認識してくれたみたいね。嬉しいわ」

「その見てて不愉快になる笑いがいつになったら見られなくなるか、楽しみだわ」

私は思わず悪態をついた。息を吐くように、自然に口から出た。さっき言えなかった分だ、と思うことにした。

「私もいつ貴方たちが絶望に飲み込まれるか楽しみ。それじゃ、ゲームのルールの説明にでも入らせてもらおうかしら」

女がフィンガー・スナップをすると、先ほどの気味悪い裂け目から、また女がスルリと出てきた。

出てきた女は、金髪で、まるで動物の耳のように2本の尖りのある帽子を被り、ゆつたりとしたロングスカートを身に纏っている。さらに、青い前掛けまで着ているので、見た目は非常に奇妙な姿だ。そして、何より気になるのは前から見ても分かる、何本もの狐の尻尾。

今出てきたあの女は『人間』か？コスプレにしては、あまりにリアルすぎる。というよりかは、あの尻尾から造形物のような、言うならば『アンリアリティ』を感じない。「藍、説明は任せたわ」

紫色の方の女は、尻尾の生えた女に命令すると、こちらに背を向け、裂け目の方まで歩き始めた。尻尾の生えた女は、黙って軽く頭を下げた。

「待て！ 逃げるつもりか！」

魔理沙は、その女を引き留めようと叫んだ。

「心配しなくてもまた会えるわ。貴方が早々に殺されなければ、ね」

そう言い残すと、裂け目に消えていった。

ステージ上に残った尻尾の生えた女は、その後頭を上げてマイクスタンドの方の前に立った。

「それでは、ルールの説明に入らせてもらおう。その前に、名を名乗っておこう。私の名前は八雲藍、先ほどの私の上司、そしてこのゲームの主催である私の主人の名前は八雲紫

だ」

あの紫色の女とこの狐尾の女は意外にも同じ名字だった。しかし、どうもあの2人は親子や姉妹には見えない。ましてや、藍が「上司であり主人」と言ってるので、主従関係が存在することが予想できる。偶然の一致だろうか。

「このゲームは誰かが誰かを殺すことで動き出す。これを『事件』と呼ぶ。ただし、1つの『事件』では1人しか殺してはいけない。さらに、『事件』の加害者のことを『クロ』と呼ぶ。そして、それをお前たち全員が力を合わせて、推理し解決していく。ここまで何か質問はあるか？」

八雲藍の言葉に反応して、緑髪でロングヘア、蛙の髪飾りをしている「東風谷早苗」が手を高々と挙げた。

「はい、質問です。我々が永遠に『事件』を起こさなかった場合、どうなるのでしょうか」「それについては、後々詳しく説明する。まあしかし、誰も事件を起こさなかったら、誰もここから出ることは出来ないだろうな」

答えが返ってきた後、早苗は挙げていた手を自身の顎にあて、少し考え込んだ。

「……そうですか、分かりました。続きをお願いします」

「では、続ける。この『事件』で生じた死体を『クロ』以外の4人を発見した時点で、『事件発覚』とする。『事件発覚』してから72時間後に、このゲームのキモである、『ゲン

ソウサイバン』を行う。……質問は、と言ってもゲンソウサイバンのことだろう。今から説明するから質問は不要だな。『ゲンソウサイバン』とは、生き残っている全員が一堂に会し、証拠や証言、話し合いで『クロ』を探し、処刑する。全員参加型の裁判だ」

「処刑……？ 処刑ってどうするつもり？ 他の人達でその『クロ』をリンチするっていうのかい？」

赤い髪で両サイドに三つ編みを結っている「火焰猫燐^{かえんびょうりん}」が小さく呟いた。

「処刑は我々が行う最高のパフォーマンスだ。いくらここが社会から隔絶した空間とはいえ、秩序を乱す者は抹消されなくてはならない。その点に関しては、処刑時に詳しく説明しよう」

私たちが事件を引き起こすことありきで話を進めている藍に腹が立った。が、ここで反抗しても何も進展しないだろう。今は従うしか、ない。

「そして、お前たちに『事件』を起こす動機を与えよう。この18人の中に1人だけ……『ウラギリモノ』がいる。つまり、私たちの内通者^{スパイ}だ。『クロ』はその人物を殺す、という動機で『事件』を起こすことになる」

衝撃が私の中を突き抜けた。藍の話だと、仲間だと思っていたこの18人の中に奴らの仲間がいるらしい。言うまでもないが、私ではない。疑いの目を持っているわけではないが、横の魔理沙を見る。魔理沙も私の方を見ていた。疑念と驚嘆が渦巻いている目

をしていた。

私は必死に首を横に振る。この状況だ、疑心暗鬼になってしまうのだ。私も、魔理沙も。他の全員も。

藍はそんな様子を意に介せず話を続ける。

「何故『ウラギリモノ』を殺害しなければならないか？『事件』が最後の『事件』から432時間、つまり18日間発生しなかった場合、このゲームは『ウラギリモノ』が1人勝ちしてしまうこととなり、他の全員は処刑されてしまうからだ。つまり、このゲームは『クロ』は『ウラギリモノ』を殺害しなくてはならなく、間違つて無関係の人物、『シロ』を殺してしまうと裁判での標的になってしまう、という寸法だ。中々よく出来ているだろうか？」

あまりに残酷なルールだ。まず、誰かが誰かを殺すことから始まるルールだ。そして、我々『シロ』が怖がつて、いつまでも『事件』を起こさないと私たちは奴らに殺される。どう足掻いても、殺人から始まり殺人に終わるゲームになってしまう。

「さて、ではこれから細部の説明に入る。まず、共犯関係について。この場合、実行犯だけが『クロ』となり、共犯者は『シロ』のままだ。よつて、共犯関係というのは生まれにくいだろう。次に、『ウラギリモノ』に関連することを説明しよう。まず、『ウラギリモノ』は絶対に『事件』を起こさない。そして、『ウラギリモノ』の殺害を成功した場合、

その瞬間にこのゲームは終了する。終了した時点での生存者全員が脱出することが出来る。だから『クロ』は『ウラギリモノ』を殺害できたかどうかはその瞬間に分かる、ということだ。さらに、話を進めよう。『ゲンソウサイバン』についてだ。もし、『ゲンソウサイバン』で『ウラギリモノ』が処刑された場合、その瞬間にゲームが終了し、その『事件』の『クロ』だけが生きて脱出できる。もし、『ゲンソウサイバン』で『シロ』が処刑された場合、『クロ』は生き残っていることになる。生き残った『クロ』は絶対に次の日に再び事件を起こさなくてはならない。逆に『ゲンソウサイバン』で『クロ』が処刑された場合、次の日は絶対に事件が起こらない。起こしてはいけない。ルール違反は許さないからな」

本当に細かいところまで作り込まれているルールだ。穴という穴は見つからない。それにしても、残酷だ。『クロ』がその日の『ゲンソウサイバン』を乗り切れたとしても、次の日にはまた『事件』を起こさなくてはならない。だから、よっぽどの自信が無い限り、『クロ』になるのは危険だ。それと同時に、この場に疑心暗鬼をもたらした。自分以外の誰かがもしかしたら『ウラギリモノ』かもしれないのだ。そう思ったら、他人をそうそう信じられなくなってしまう。今が、まさにその状況だ。

「さて。私の役目はこれまでだな。体育館の扉は開けておくから、自由に校舎を探検してみるという。それでは、幸運を祈っている」

藍は裂け目の中に消えていった。その後、裂け目は閉じて、跡形もなく消えた。

しかし、全員のそれぞれに対する疑惑はこの場に残ったままだ。『ウラギリモノ』がいと判明した以上、誰も信じられないのは無理はない。私も、誰かを完全に信じることが出来ない。

「霊夢、行くぞ。ここで黙っててもウラギリモノの思う壺だぜ」

魔理沙から話しかけてきた。非常に意外だった。魔理沙は、精神的に私より弱いと思っていたので、この状況に飲み込まれていると思っていた。しかし、自ら打破しようとしていた。私が思っている以上に、魔理沙は強いのもかもしれない。

「ええ、そうね。……行きましょう。ウラギリモノを倒すために」

「分かっているさ。お前がウラギリモノじゃないと、信じてるぜ」

信頼されてる、と実感した。だが、この言葉の返答に困った。安直に「ありがとう」などと言って良いものか。こんな葛藤があるなんて、私は魔理沙より弱い。私も魔理沙のように強い心を持たなくては、この状況で戦えない。

「ありがとう。私も信じてるわ、魔理沙」

何とか言葉を絞り出した。私も魔理沙を信じたい。魔理沙はニコつと笑うと、「おう、じゃあ探検開始だ。とことん探すぜ」と言って、扉の方に歩き出した。私もそれに続いて、扉に向かった。

探索

仄暗い廊下の奥に

魔理沙が扉を右に引くと、ガラガラと音を立てながらゆつくりと扉が開いた。

その奥に広がっていたのは、閉塞感に満ち満ちた廊下だった。窓が一切なく、電灯は紫色に薄く灯っている。

さらに、廊下の突き当りには、体育館の扉と同じくらいの大きさの扉があった。その途中には広間のような空間も見える。

魔理沙は、興味深そうに薄紫色の電灯をまじまじと見つめている。

「暗いようだが、何故かちやんと奥の扉まで見えるな。この電灯、怪しいな」

「今はそんなのどうでもいいわよ。まずは、この校舎全体の把握をしなくちゃならないでしょ」

私は通路を歩き出す。魔理沙が少し遅れて私についてくる。

「そうだな、後々ゆつくり調べるとするか。その時は、霊夢も一緒に調べようぜ」

「私は別にそんな電灯に興味ないわよ。物好きね」

どンドン歩を進めていく。そして、開けた空間に出る。辿り着いてすぐ私は、思った

ことをつい口に出した。

「ここは何？ただの広間かしら。」

「そうっばいなあ。何にも無いのか？」

見回して気付いたが、ここは十字路の中心になっているらしい。今、私たちが立つている方向から見て、真正面に先ほどから見えている扉、後ろには体育館、東側にも西側にも通路がある。

「霊夢、私たちは真つ直ぐ進もうぜ。横の通路は他の奴らに任せよう」

魔理沙の言っていた「他の奴ら」が少し気になって後ろを振り返ってみると、他の16人全員がいた。中でも、一番最初に目に入ったのは、私たちのすぐ後ろにいた「本居小鈴」もとおりこすずだった。その時に、小鈴と目が合った。

「……一緒に来る？」

すると、ニコツと小鈴は笑顔を浮かべて、「はい！私も行きます！」

と元氣よく答えた。その光景を見て、魔理沙は帽子のつばを人差し指でほんの少し突き上げた。

「えーと、確か……小鈴、で合ってるよな？」

「はい。そういう貴方は、霧雨魔理沙さんですね。それじゃあ、行きましょう！」

小鈴は私たちを追い抜いて真つ直ぐ歩いて行った。

「アイツ、中々せつかちな奴だな。霊夢、置いてかれるぜ。早く行くぞ」
そう言って、魔理沙は小鈴の後を追って行った。

あの2人と一緒に探索を考えると考えると、ちよつぱりだけ気が思いやられる。けど、退屈はしないだろう。もつとも、こんな状況じゃ退屈なんかしてられないだろうけど。

すぐに2人の後を追いかけてようとしたところ、後ろから肩を叩かれた。

振り返ると、そこにいたのは「古明地さとり」だった。

「非常に賢明な判断です。今の状況で、2人以下で未知のエリアを開拓するというのは、我々にとってリスクが高いです」

「というと?」

「もし、魔理沙さんと小鈴さんのどちらかがウラギリモノだった場合を想定してください。」

「いまいち、さとのり言いたいことがすつきりと伝わってこない。」

「回りくどいわね」

「そう、ですね。では、魔理沙さんがウラギリモノだと仮定しましょう。あの2人のまま探索を続けたら、小鈴さんの目を盗んで何かをするかもしれません。しかし、欺かなくてはならない人間が2人になると、それが難しくなるのが明白です」

「私の誰かがウラギリモノか、疑いたいわけ？」

「いえ、あくまで可能性の話です。私が言いたいのは、部屋を調べるときや重要な証拠を精査する時は、単独ではなく3人以上で行うのがベストだ、ということですよ」

さとりはその眠そうな目で真つ直ぐと私を見つめて、きつぱりと言いつつ切った。妙な威厳をその瞳から感じ取れた。

「……そうね、ご忠告ありがとうございます」

「その代わりと言つては何ですが、我々もこの東と西の廊下にある部屋は複数人で探索しますので、探索した結果の情報は偽りのない物と思つていただいて結構ですよ」

「ええ、分かったわ。それじゃあまた」

何とも言えぬモヤモヤが残つたまま、魔理沙と小鈴を再び追いかけた。

やはり、お互いをまず疑わなくてはならないのか。この疑心暗鬼は打ち破ることは出来ないのか。

しかし、それも仕方のない。何故なら、我々は18日の間に殺人を起こさないと全員が死んでしまう。そのうえ、殺人を起こさずにしても正しい人物を殺さなくてはならない。

一番嬉しい結果としては、私以外の誰かが最初の事件で見事にウラギリモノを殺害することを成功することだが、どうもそれは成功しそうもない。

逃げているように聞こえるかもしれないが、やはり私自身は事件を起こしたくない。余程の確信がないと、私には無理だ。

だから、私に今出来ることは一つ。しっかりと現状を見極め、ウラギリモノを判断する。そのためには、今はただ探索をして情報を収集するしかない。

そうこう考えながら歩いていると、扉に辿り着いた。魔理沙と小鈴の姿は扉の前にはなく、既にこの向こうにいるようだ。

ドアノブに手を掛けた時に、ほんの少しだけ話し声が聞こえた。

直感だが、あの2人はウラギリモノじゃない。少なくとも、私はそう信じている。

そう思うと、ドアノブを握る手にも自然と力が入った。きつと、私にとっての大きな判断になったのだろう。

そして、少し息を吐いてゆっくりドアを奥に押した。

扉を開くと、食堂だった。それもかなりの広さだ。そこらのとは大ききのグレードが違う。

食堂と言っても、キッチンが備わっていた。けたたましいほど輝いてるシンク。忌まわしいほど大きい冷蔵庫。あの冷蔵庫は恐らく業務用だろう。家庭用のものはあれ程大きくないはずだ。さらに電気コンロが6台並んでいる。非常に先進的だ。

先程の殺伐として疑心暗鬼な雰囲気とは一変した和やかな雰囲気、私は少し呆気に取られてしまった。

「おい、霊夢。こつちだこつち」

キツチンとは別方向の、大きな円卓の周りにある沢山の椅子の1つに魔理沙が座っていた。小鈴も隣に座っていた。

「キツチンの方はもう調べたの?」

それに対して、小鈴が「まだです」と答えた。

「にしてもここは、全員が集まるには持って来いの場所だな。そうだ、一回ここで全員の話し合いしないか?」と魔理沙は人差し指を立てた。

「話し合い?」と私はオウム返ししてしまった。

「そう。こんな形になったとはいえ、私たちは18人という大人数で共同生活するんだ。お互いの名前は知ってるけど、初対面の可能性だってある。だから、一回集まって顔合わせだ。どうだ?」

「私もそれに賛成です。もしかして、ウラギリモノなんていないかもしれないですからね」

それはどうだろうか。私には、あの八雲紫という人物からどうしようもない本気を感じる。ゲームを完遂するという本気を。

少し考えてから、私は小さく首を縦に振った。

「……そうね。私も一度顔を合わせるのには賛成」

魔理沙がニヤリと笑んだ。

「決まりだな。私と小鈴は奴らと呼んでくるから、霊夢はキッチンを調べてくれ。行くぞ、小鈴」

魔理沙は椅子から立ち上がって、テーブルに置いていた帽子を持った。

そういえば、魔理沙は何故あんな帽子を被っているのだろう。小鈴にしても、鈴の付いた珍しい髪留めをしてるし、私にしても、こんなに赤くて大きなリボンをつけている。

思い出すに『物部布都』ものべのふとは烏帽子のようなものを被っていたし、『メデイスン・メランコリー』は赤くて細い長めのリボンをつけていた。いずれも、非常に奇抜なアクセサリだ。全員が全員奇抜なアクセサリをしていたわけではないけど。

そもそも、私たちは一体どういった集団なんだろうか。お互いの名前だけが知っているとすることは、少なくとも初対面ではない気がする。が、そこまで仲の良い集団でもないような気がする。とにかく18人に記憶がないこと以外の共通点がまるで見つからない。

そんなことを考えていると、魔理沙と小鈴が私の前を通った。魔理沙が背中を向けながら、軽く手を挙げた。

私もぼやぼやしてはいられない。何か脱出するための手がかりを見つけないとまらない。その第一歩として、キッチンを調べるんだ。頼まれたというのも勿論あるが、それ以上に私の意欲が高まっている。

ドアの開く音がして、少し経ってから閉まる音がした。

私は既にその時キッチンの中央にいた。

どこから調べようかと迷っていると、先ほども目に入った冷蔵庫が気になった。

冷蔵庫に近づいて両手で取っ手を持つ。そして、見た目ほどに重くない扉を開ける。

すると、溜まっていた冷気が一気に外に出て、私を冷やした。その時に思わず目を閉じてしまった。冷気が収まった後に目を開けてみると、食材の山々が視界に入った。

冷蔵庫には有り余らんばかりの食材が所狭しと入っていた。肉、魚、乳製品、飲み物、その全てがこれだけの種類があれば誰でも好きな物を見つけられるだろう、という程にある。

私は少し気になって、近くにあった魚肉ソーセージを一本取って冷蔵庫を閉めた。

気になったことというのは、この食べ物群が危険ではないかだった。別に空腹というわけではない。

まずは、匂いを確かめる。ソーセージを鼻に近づけて、嗅いでみる。しかし、特別何

も感じることはなかった。

次に、毒味。オレンジのフィルム上に一本だけ浮き出てる赤のテープを持って、勢いよくフィルムから剥がす。

そして、そこから全体のフィルムを剥がし、ソーセージを裸にする。

てっぺんの部分を一口サイズに手で千切り、それをまた鼻に近づけてみる。やはり、異臭はしなく、普通のソーセージのかぐわしい匂いだった。

試しに千切ったソーセージを少し舐めてみる。がこれもまた普通だ。

最後に、それを口に入れる。少しの間、咀嚼して私は一つの結論に至った。

これは普通の魚肉ソーセージだ。百歩譲つても譲らなくてもこれは普通のソーセージなのだ。味も至って普通だし、硬さもさらに普通。そして、特に危険でない。恐らく、冷蔵庫の中の物は全て安全だろう。

口の中のソーセージを咀嚼しきって飲み込んだ後、残りのソーセージを啜えて再び冷蔵庫を開く。

私は驚いた。扉を開いてみて、非常に驚くことが私の目の前で起こっていた。

なんと、私がソーセージを取った場所に再びソーセージが置いてあったのだ。

見間違いではないかと目をこする。しかし、見間違いではない。

そのソーセージを取って、また扉を閉める。再び、フィルムを剥がしてみる、疑いよ

うもなく普通だ。驚きのあまり、加えていたソーセージを食べ切っていたことに気付かなかった。それに気づいたのは、2本目のソーセージを口に運んだ時だった。

食べてみると、やっぱり普通だった。誰がどう言おうと、普通のソーセージだ。

そして、また扉を開けてみる。予想通り、ソーセージがまたそこにあった。

思わず「これは……」と声を漏らしてしまった。

推測するに、この冷蔵庫は食材の尽きることの無いものだろう。ソーセージの一件でそれが分かる。最悪の場合、18×7、すなわち126日ここに滞在しなくてはならない。だから、こんなものが用意されてるのだ。どういう原理なのかは分からない。見当もつかないし、別に気にもならない。

とりあえず、1つ収穫だ。この冷蔵庫は無限に食材が出てくる。衣食住のうち、食に困ることはないだろう。

冷蔵庫の扉を閉めると同時に、食堂の扉が開く音がした。

「おーい、霊夢。いるか？」魔理沙の声も聞こえた。

どうやら、探索はこれまでのようだ。残りのシンクやら電気コンロやらは後々調べるとしよう。

私は扉の方を向いて「いるわよー」と大きな声で叫んだ。

秘密の崩壊

私はキッチンから一番近い椅子に座った。魔理沙と小鈴が連れてきた他のメンバーも次々に座った。私の左側に座ったのが「魂魄妖夢」、右側に座ったのが「鈴仙・優曇華院・イナバ」、テーブルを挟んで私の真正面には魔理沙が座った。私から見て、魔理沙の左には小鈴、右には水蜜が座った。

全員が座った後、一番最初に口を開いたのは、偉そうに頬杖をついている正邪だった。「それで？ 何を話し合うんだ？」

その正邪の隣にいる小鈴が、「兎にも角にもこの18人で共同生活をするので、そのための自己紹介や先程まで行ってもらった探索で判明した情報の共有等ですね」

と答えた。

すると、正邪と小鈴の反対側に座っていた布都が、

「しかし、この中にウラギリモノがいるのだろうか？ 自らの情報を開示するというのは

愚策では？」

と腕を組み、目を閉じて言った。

それに対して、

「いえ。逆です。むしろ全員が公表することで、ウラギリモノがうつかり……なんてことも有り得ます。」

と、さとりが決して大きくない声で反論した。隣にいた雷鼓は、

「少なくとも、探索した場所についての情報共有はしましょうよ。じやなきや、バラバラに探索した意味が無いわ」

とニコニコしながら付け加えた。

すると、水蜜の横にいた慧音が手を小さく挙げた。

「では、私から報告させてもらおう。いいか？」

慧音が全員を見回したときに目が合ったので、私は小さく頷いた。全員の顔を確認した後、慧音は再び口を開いた。

「……では、報告する。私と、両隣の水蜜と燐で再び体育館を探索してきた。体育館には、窓が一つも無く、入り口と器具が置いてある部屋への扉しか、体育館を出入りする扉は無かった。器具室には、バスケットボールやバレーボール、バドミントンのラケットやシャトルなど、だいたいの室内競技は網羅してあった。が、器具室には脱出の手助けになるような物は無かった。以上だ」

「今の報告に嘘偽りはないよ。ね、水蜜？」

と、隣の隣が水蜜に訊いた。

「そうですね、私たち3人いましたし、お互いにお互いの目を盗んで何かを隠すというのは不可能でしょう」

水蜜は、落ち着いた口調で答えた。

体育館には脱出のためのヒントは無さそうだ。……が、やはり、自分の目で見て確かめたい、という気持ちはある。話し合いが終わった後にでも、魔理沙でも誘って行ってみよう。

「では、次は私が報告しますわ。情報は提供されたので、お返ししなくてはなりませんからね」

と、隣の隣の咲夜がすまし顔で言った。

「私と、メデイスンと早苗で食堂の近くにあった部屋を調べましたわ。部屋は保健室でした。綺麗なベッドが4床あり、薬箱は3つ常備されてありました。中身もしっかり点検しましたが、不審な物は特にありませんでしたわ。薬学に長けているわけではないので、一概には言えませんが」

すると、咲夜の隣に座っていたメデイスンがその隣の早苗に小さな声で確認した。

「どうだったっけ？」

「おそらくなかったと思います。私も得意ではありませんので、良く分かりません」

「えー。確か危なそうなの無かつたっけ？」

それ以後の会話は声小さくて、もう聞こえなかった。

咲夜がその2人の会話を見ていて、ちよつとだけ顔に焦りを見せた。

「えーつと……つまり、そういうことですね。以上で、報告を終わります」

保健室……何やら危ないニオイがする。毒や危険な薬物があるかもしれない。これも、やはり自分で確認しておきたいところだ。しかし、私も全く薬学の知識はない。この手に詳しい人はいないだろうか。全員記憶が欠如してるから、誰もなさそうだけど。

「次は……順番からして我らか？」

早苗の隣に座っている布都が呟いた。

「そうじゃないかな」

その隣の鈴仙が言った。

「そうか！では、報告させてもらおう！我と隣にいる鈴仙殿、そして霊夢殿の隣にいる妖夢殿の3人で、浴場を探索した。体育館を東側、この食堂を西側だとしたら、南の廊下の途中に浴場はあった。18人分のバスローブも用意されていた。普通に我々が宿泊施設に来ていたのなら、素直に喜べるくらいに整っていた施設だったぞ」

と、布都は自慢げに報告した。

「今の報告に関して嘘偽りはありません」

と、妖夢。

「同じく。強いて付け加えるなら、浴場にも窓は一窓もなかったわ。やっぱり、外に出られそうな場所は一つもなかったわ」

と、鈴仙が補足した。

なんとここには浴場があるのか。私は非常にお風呂が好きだ。これは嬉しい。

これも後で視察に行ってみよう。ただの興味本位なだけなんだけれども。

「時計回りみたいだし、次は霊夢殿ではないか？」

布都に指をさされた私は、少しだけ戸惑った。

「私はちよつと後回しにしてもらえる？今すると、移動量がちよつと多くなっちゃうから」

「そう、それならしようがないわね。じゃあ、次の私たちの番でいいかしら？」

と、妖夢の左隣の雷鼓が言った。

「悪いわね。頼んだわ」私は軽く頭を下げた。

「了解よ。それじゃあ報告するわ。南の廊下の突当りにあった扉の奥を、私と私の横のさとり、そしてさとりの隣の天子の3人で調べたわ。あつたのは、それぞれの個室……つまり住居スペースよ。扉の奥にも少し廊下が続いていて、向かい合わせに2つの扉、それが9セット、合計18部屋あつたわ。恐らく、全員分の部屋があそこにあると思う

わ。この3人はそれぞれ自分の部屋を探索したけど、皆同じ間取りの部屋だったわ。置いてある家具も同じ。まあ、自分で後で見るといいわよ。以上、これで報告を終するわ」

「……特に誤りはありません。雷鼓さんの言っている通りです」

と、さとりは覇気のない声で言った。

「付け加えることもないわ。さあ、次の報告をお願いしますわ」

天子は割と不機嫌そうにそう言った。

個室……正直ほつとしていた。体育館で全員で雑魚寝となると、非常に危険だった。しかし、個室がある以上、寝る時の安全が確保されたわけだ。個室にカギが掛けることが出来れば、の話だけでも。

「霊夢さんの報告を除いたら、次は私たちですね。ちよつと報告するのは気が引けるんですがね」

天子の隣の星が乗り気じゃなさそうに言った。

「何で？言っちゃえばいいじゃん」

と、その横のチルノ。その隣では正邪がニヤニヤしている。

「そいつは良い子ちゃんだからなあ。まあ、あんな部屋のこと言わなくていいならわざわざ言いたくはないがね」

「ちよつと。ちゃんと報告してくれなくちゃ困るわ」

天子がほんの少しだけ声を荒げた。

それに対して、星が申し訳なきように報告を始めた。

「すいません……。では、報告をします。私とチルノさんと正邪さんで北の廊下の突当りにあつた部屋を調査しました。単刀直入に言いますと、部屋にはそれはそれは沢山の凶器が置いてありました。名前を付けた方が分かりやすいので、あの部屋は凶器室……と単純ですが名付けさせていただきます。我々もしつかりと見てはいませんが、凶器にはちらほらと使用された痕跡が残ってました。誰の物かは分かりませんが、血液が付着している物もありました。以上です」

星の報告が終わつた後、チルノは自信満々に腕を組みながら、「星の言つたことに間違いはないよーあたしも見たからね」

と言つた。

正邪は「右に同じ」と言つて、発言をやめた。

星の報告が終わつた後、嫌な静寂が18人を覆い尽くした。それもそのはずだ。凶器の存在が発覚して、殺人が可能であることが現実的になつてきたからだ。

凶器室というのは、悪い意味で非常に気になる。どんな凶器があるのだろうか。常識的には考えられる刺殺や撲殺が出来る凶器は勿論存在するだろうけど……。

しかも、星によると使用された痕跡や血痕があるらしい。生理的にそんなものは見たくもないし、関わりたくもないけど、調べないわけにはいかないだろう。

場の空気を変えるためにも、私は自発的に発言した。いや、発言せざるを得ないような気がした。

「さて、それじゃいよいよ私ね。それじゃ付いて来て」

私は椅子から立ち上がって、キツチンの方に向かった。

魔理沙は不思議そうな顔して、「おい、霊夢。そっちに何があるんだよ?」と訊ねてきた。

「来て見れば分かるわ。何よりここで言っても信じてくれないでしょうからね」

と答えて、私は冷蔵庫の前に立った。

小鈴が魔理沙と負けず劣らず不思議そうに私に訊ねてきた。

「冷蔵庫が一体どうかしたんですか? 一見したら、普通の冷蔵庫みただけど……」

私は取っ手を握り、冷蔵庫を開けた。

そして、先程毒味で食べたソーセージを置いてあるだけ手にした。合計、10本あった。

「ソーセージを全部取り出すでしょ?……じゃあ一番近くにいるから妖夢、ちよつとこれ持って。大丈夫、さつき私も食べたけど、危ない物が入ってなかったわ」

持っていたソーセージを妖夢に差し出す。

「え、私？いいですけど。」

不安がりながら妖夢がソーセージを受け取った。

そして、私は説明を始める。

「いい？今冷蔵庫の中から取り出したソーセージは全部妖夢が持つてるわね。つまり、今冷蔵庫にはソーセージは一本もないってこと。だけど——」

説明半ばに私は冷蔵庫を勢いよく開けた。開けて中身には、私が検証した通りソーセージを取り出した前と同じ本数、つまり10本元通りに残っていた。

「つまり、ここのことよ」

魔理沙は冷蔵庫のソーセージと妖夢の持つているソーセージを交互に、かつ興味深そうに眺めた。

「……ほう、こいつは面白いな。食料と飲み物には困らないってわけだな。」

魔理沙以外の全員もだいたい舌を巻いていた。気になったのは、咲夜とさとの驚きの色は薄かったことだ。少々、疑り深くなっているのかもしれない。ウラギリモノを探すのに必死になつてるようだ。

水蜜は小さく首をかき上げて、

「何で物が無くならないんでしょう？非常に気になりますね」

と呟いた。

「そんなのどうでもいいよ、結局は物が無くならないってことでしょ。便利な物つてことね！」

と、何故かチルノは自信ありげに水蜜に言った。

その会話を見ていて少しほっこりしていた私の肩を誰かが叩いた。

「ねえ、他に何か面白い物は見つからなかったのかい？」

叩いていたのは燐だった。

「時間が無くて冷蔵庫以外の物を詳しく調べられなかったの。」

「ふうーん……んじゃ他のところは手つかずってことだね？まだ何かあるかもだね」

「そう、ね。私は他の部屋の調査に行きたいから、ここの調査は頼んだわ」

「了解だよ」

そういうと、燐はシンクの方に駆け足で行った。

私は、体育館はいいとして、浴場と個室、そして目玉の凶器室を自分でしっかり調査しておきたかったので、魔理沙や小鈴を誘おうと声を掛けた。が、

「悪い、私はこの冷蔵庫に非常に興味がある。他の奴を誘ってくれ」

「私も魔理沙さんに同じです。すいません」

と2人とも聞く耳を殆ど持ってくれてなかった。

「さすがに一人で調査を行うのは信用度を落としてしまう恐れがある……と思っていた矢先、

「私も行くわ!どんな個室か気になるもの!」

「それなら、私も行く。どんな凶器があるか、自衛のためにも情報が必要だから」

と、近くにいたメデイスンと天子が声を掛けてきた。正直、声を掛けてくれて肩をなで下ろした。

「助かったわ。一人で行くのはさすがにね」

それに対して、天子が偉そうに腕を組んで、

「貴方が一人でここを調べたつていうのもちよつと引つかかるし、私自身が監視しといった方がいい、と判断したまですよ」

と毒づいてきた。

「それでもいいわ。血だらけの危険物を一人でなんて見に行けないし。」

そんな天子とは対照的に、メデイスンは笑顔だった。

「私は単純に個室が見たいから行くわ。少なくとも一夜はいなきやいけないことになりそうだし、しっかり視察しとかなないとね。」

単純な思考だなあと、これまた私自身も単純に思った。

「よし、人数も集まったし、調査しに行くわよ」

折れた三本の矢

私たちは食堂から中央のホールまで出てきた。さつき来た時と変わらず、このホールは何となく気持ちの悪い空気が流れてる。

そんなことはお構いなしに、メデイスンはキョロキョロと廊下のあらゆる方向を見回している。

「個室ってどっちだったっけ？ 確か南だっけって言ってたわよね？」

「西の食堂を背にして立ってるから……こっちよ」

と、言い放つと天子はホールを右折した。

「あ、ちよつと待ってよ！」

それに遅れてメデイスンが天子の後を付いて行つた。

私はその2人の姿を後ろから眺めていた。こんな状況じゃなかったら、この光景を見て単純に笑っていられるのに、と思つてしまった。

視線を感じたのか、メデイスンが振り向いた。

「霊夢ー？ 何してるの？」

「何でもないわ。……行きましよう」

素っ気なく答えて、メデイスンと天子の後に付いて行った。素っ気なく返事してしまつたことにちよつと後悔した。

私が2人に追いついた時には既に浴場を通り過ぎていた。ゆつくり歩いたせいだろうか。

個室への扉のノブは天子が握っていた。

「天子ー、早く開けてよ」

どうやら天子は私をずっと監視していたようだ。ずっと私を怖い表情をしながら見ている。

「……ええ、今開けるわ」

私が怪しい行動をしていなかったのを確認できたようで、メデイスンの言葉に従つて天子が扉を開けた。

私とメデイスンは天子が開けた扉の奥を覗き込んだ。そこにはまた廊下があり、沢山の扉があつた。

雷鼓の話によると、ここにある部屋は全て各人の個室だつたはずだ。

一番手前にある1組の向かい合わせの扉をよく見てみる。すると、向かつて左側の扉のドアノブには「TORAMARU」と彫つてあつた。おそらくここは星の部屋のだろう。それなら向かいの部屋は、と視線を向けるとドアノブには「MONNOBE」と

彫つてあつた。ということは布都の部屋だろうか。

すると、急に天子の後ろ姿が視界に入ってきた。

「見るだけじゃ分らないでしょ。行くわよ」

ずんずんと天子が廊下を歩いて行く。天子が1組目と2組目の扉の間辺りまで歩いてから、慌てて私とメデイスンは天子に付いて行く。すっかりこの陣形が定番になってしまっている気がする。

一足先に天子が2組目の扉の前に立つ。左と右の扉のノブを凝視している。

「ここは違うわね。貴方たちの部屋もここじゃないわよ」

そう言うのと、天子はまた歩き始めた。

その様子を見て、メデイスンが軽く口を尖らせて「天子さま、歩くの早くない?」と、私に言った。

先程の冷たい返答を反省して、今度は満面の笑みでメデイスンに答えた。

「そうねえ……早めに追いつかないとね」

少し息を吐いた後、メデイスンは真面目な口調に変わった。

「ところでさあ、話は変わるけど、霊夢は今のところウラギリモノは誰だと思う?」

この場面、どう答えたらよいだろうか。

平々凡々に自分の怪しいと思う人物を挙げた方がよいのか。だとしたら、私はさとり

か咲夜と答えることになる。まだ分からないという回答も無難だが、逆に目立たないようになっている、と取られて怪しまれる可能性もある。疑われる行動や言動は避けたい。つまり、ここで最も安定した立場を維持できる発言は攻めの一手しかない。

「うーん……悪いけど、メデイスンかな。」

それを聞いたメデイスンは少し足が止まり、目を大きく見開いた。まさか自分と言われるとは思わなかったのだろう。

こんな答えを理由なくしたわけではない。彼女の反応を窺いたかったからだ。

メデイスンは再び歩きはじめ、余裕ある表情に変わった。

「予想外。まさか私なんて。しかも目の前で言われるなんてね。他の人はどう思う？ 例えば——」

と伸ばして通り過ぎた2組目の扉の方をチラリと見る。

「チルノとか小鈴とかはどう思う？ 偶然、目に入ったから適当に選出しただけなんだけどね」

ちなみに、チルノの部屋は左側、小鈴の部屋は右側にあった。

ここは無難に思った通りの事に対応したほうが良いだろう、と私は判断した。

「小鈴は私のカンだけど恐らく違うわ。チルノに関しては、まだ情報が集まってないから判断のしようがないわ」

「カンねえ……。もしかして、私はカンで疑われてるのかしら？」

ここがターニングポイントだろう、と薄々感じていた。この返答を間違ってしまったら、メデイスンから常に疑いの眼差しを向けられることとなり、最悪の場合殺されてしまうかもしれない。一体、どう返答するのが最善だろうか。

私が言葉に詰まっていると、「メデイスンの部屋あつたわよ」と天子が大きな声で言った。どうやらメデイスンの部屋は3組目らしい。

メデイスンは「はい」と返事して、私に、意味深でにこやかな笑顔を向けて天子のもとへゆつくりと走って行った。

返答をまだ思い付いていなかったもので、地獄に仏だった。むやみやたらに誰かを疑うのは、かえって危険を被ることが分かった。もつと慎重な言動をとらなければ、こちらがウラギリモノに欺かれてしまう。

「霊夢ー、そこで何してるのー。早く私の部屋見てみようよー」

メデイスンが振り向いて私に手招きした。あの手が、私を偽りに誘おうとしているのではないと信じて、2人のもとへ向かった。

メデイスンが自室の扉を開けた。後ろから私と天子が部屋を覗く。その時一番最初に私の視界に入ったのは、とても大きなベッドだった。

「わあー！ 大きな部屋だわー」とメデイスンは、扉を開けながら感嘆した。

それにしても、随分と広い部屋だ。扉が全開になって、部屋の全体を見渡せるようになった。最初に見えていたベッドは、3人は寝られようかというほどの大きさだ。部屋の左奥に位置している。

右奥には、小さな個室があった。おそらく、トイレか個室用のお風呂、もしくはユニツトバスだろう。

一番気になる点は、ベッドと個室の間に挟まれるように小さな人形が横たわっていることだ。天子がその人形を指差して、「あの人形……ちよつと貴方に似てない？」とメデイスンに言った。

言われてみると確かに似ている気がする。どこがどう、とは言い難いが、強いて言うならば雰囲気似ている。

一方で、メデイスンは先程のはしゃいでいた様子と打って変わって、じつとその人形を見つめて動かない。

「あの人形がどうかしたの？」

私が問いかけた瞬間、彼女は那人形に向かって走り出した。

そして、彼女は那人形を乱暴に掴み、こちらに背を向けながら、まるで向こう側を見ようとしているかのようにじつと見つめる。

「『鈴蘭』……」

突然、メデイスンが呟いた。

「スズラン？ それがどうかしたの？」

天子が再びメデイスンに訊く。その質問に対して、メデイスンは振り返って、両手に持つてる人形をこちらに突き出した。

「そう！ 『鈴蘭』！ 私、この人形を見た時に何か懐かしさみたいなモノを感じたの。だから、とにかく近くで見たい、と思つて持ち上げてみたのよ。そうしたら、私のないはずの記憶の奥底から『鈴蘭』というワードが湧き上がってきたわけよ！ 一体、何が『鈴蘭』なのかはこれぼっちも分からない。だけど、私が思うに、これは私たちの記憶に関わりあるものはある気がするわ。少なくとも、私の直感では『鈴蘭』は何か私に関係している、つて言つてるわ！」

天子と私は小首を傾げるしかなかった。その様子を見て、メデイスンは咆えた。

「ちよつと！ 信じてないでしょ！ 本当よ本当！ 多分、一人一人の部屋にこういうモノはあるのよ！ 試しに行つてみましょうよ！」

メデイスンは人形を足元に静かに置いて、私たちを押しつけて部屋を飛び出した。

私は、天子に肩を竦めて見せた。天子も呆れたような表情をしていた。

「ほら、早く！」

メデイスンに急かされて、私たちは後を追いかけた。

「ここは天子の部屋ね。入るわよー！」

「あ、ちよつと！」

メデイスンは乱暴に天子の部屋の扉を開けた。天子の部屋はメデイスンの部屋の隣にあつた。

おてんばな子だなあ、と思つてしていると天子に右腕を掴まれた。

「何ぼーつとしてんのよ！ 早くしないと私の部屋が荒らされるわー！」

そのまま私は天子に引つ張られ、走らされた。そこまでの距離でもないのに。

少し転びかけながらも、天子の部屋に到着した。割とガツチリと腕を掴まれていたので、ちよつぴりだけ腕が痛い。

「ほらー！ やつぱり天子の部屋にもあつたわよー！」

部屋の中からメデイスンの嬉々とした声が聞こえた。

私は、開きつぱなしになっている扉から部屋を覗く。

驚くことに、部屋の中心に橙色をした剣が横たわつていた。とてつもなく厳かで、全てを見通しているかのような雰囲気をした剣だ。

「ほら、やつぱり皆の部屋にそれぞれあるのよ！ 私は小さな人形だったけど、天子の場

合はこの剣なのよ！」

メデイスンが仁王立ちして、自慢げに言った。その様子を見て、一瞬だけチルノを想起した。

天子の様子をチラリと窺って見ると、口は半開き、目は全開になっていた。

次の瞬間、「貸して!!」と叫んでさっきのメデイスンのように剣に向かって走った。そして、両手で柄を握って、自分の目線まで持ち上げた。

しばらく剣を見つめた後、天子は小さく息を吐いた。そして、「『天界』……？」と、不思議そうに呟いた。

「テンカイ？ テンカイってどの？」 私は思わず聞いた。

「『天空の世界』って書いて『天界』よ。……なんでそんな所が思い浮かんだのかは分からないけどね」

「私が『鈴蘭』で天子が『天界』……共通点は見つからないわね」メデイスンは深く考え込みながら言った。

「どう？ 私からのプレゼントは？」

突如として、メデイスンのものでも、天子のものでも、勿論私のものでもない声がし

た。聞き覚えのある声だった。そして、妙な不快感を覚える声で、既視感ならぬ既聴感を感じた。

私たち3人は声の主を探す。どこからした声なのか検討もつかない。普通、声が出たからその方向が分かるのだが、何故だか全く分からない。メディスンと天子の慌てふためいている様子を見るに、私と同じ状況らしい。

ついに混乱したこの状況に耐えかねて天子が叫んだ。

「どこにいるのよ？ 隠れてないで早く出てきなさいよ！」

声が答えた。「ここよ、ここ。もう、そんなに怒鳴ることもないでしょ？」

ベッドの近くにある机の下から手が伸びて、椅子を右に退けた。

「そんな大きな声出さなくても逃げないわよ」

机の下から、八雲紫が現れた。はつきり言つてホラーだ。机は壁に面しているから奥には隠れることは出来ないし、そもそも机の下に人が1人も隠れられるようなスペースはない。一体、如何にしてこの部屋に入って、今まで隠れていたのだろうか。

「ふふ、その剣凄いでしょ？ 持つてくるの大変だったんだから」

左手に持つていた白い扇子で口元を隠しながら、淑やかな微笑をした。

「……こんな物用意して何がしたいのよ」私はやや語調を強めて訊いた。

「貴方たちに本来の自分を思い出せるようなヒントよ。思い出して、ウラギリモノに辿

り着くことが出来たら万々歳じゃない。感謝くらいして欲しいわね」

その言葉の後、天子が小さく息を吐いてゆっくりと八雲紫に近づく。

「本当、感謝してもしきれないわ。だって——」握っていた剣を大きく振りかぶる。

その様子を見て、天子が何をしようとしているのか分かった。止めなくては。あの女に歯向かつてはいけない、私のカンが強くアラートを鳴らしている。だけど、遅かった。

「アンタを殺せばこんな茶番終わらせられるでしょ！」

天子は思いつきり剣を八雲紫に向かって振り下ろした。私はその瞬間思わず目を瞑ってしまった。

硬質な物どうしがぶつかり合ったような鋭い音がした。その音を聞いて、私はゆっくりと目を開けた。

驚くことしか出来なかった。なんと八雲紫は、手に持っていた扇子を閉じて、天子の剣を受け止めたのだ。しかも片手でだ。

外見は私たちより少し年上の普通の女性なのに、実は服の下は筋骨隆々だったりするのだろうか。いや、そんなことはどうでもいい。今の状況は非常に危険だ。天子は両手が塞がっているのに対して八雲紫は片手が空いている。

「ちよつと遊びがすぎたわね。お仕置きしてあげるわ」八雲紫が不気味な口調でそう言う、空いている手で天子の腕を掴んだ。

掴まれた一瞬、天子の表情が軋んだのを見るにかなりの力で掴まれていると推測できた。

突然、八雲紫の目の前に、体育館で見た怪しげな裂け目が現れた。嫌な予感がする。むしろ、それしかない。

「天子、早く離れて！」メデイスンが叫んだ。

八雲紫の手を振りほどこうとするが、一向に離れず、天子が疲労していくのだけがはつきりと分かった。

「そんな簡単に逃れられたら……こんなにもがいてないわよ！」と、天子は辛そうに言った。

必死な天子に対して、八雲紫は余裕綽々とでも言うような涼しい顔をしている。そして、天子の腕を強く引き、裂け目の中に無理やり入れた。その瞬間、天子の手から剣が離れてしまった。そして、ゆっくりと裂け目が閉じた。

「ちよつと!! 早く天子を早く返してよ!」と、メデイスンは怒号を浴びせる。

「まあまあ、そんなに焦っちゃダメよ。折角のお楽しみなんですもの。ジャマしちやいけないでしょ?」

『お楽しみ』なんて言ってるが、楽しんでるのは八雲紫だけだ。私とメデイスンは兎に角心配と恐怖とで一杯だ。現に、私は足がすくんで動くことが出来ない。

八雲紫が落ちた剣を片手でゆっくりと拾い上げて、何故か柄を上に向けた。「そろそろね。さあ、お待ちかねのフィニッシュよ」

閉じていた扇を再び振って開くと、剣の真上に再び裂け目が現れた。

まさか……まさか……！

裂け目から、天子が背中から落ちてきた。落ちてくる天子がゆっくりと見えた。助けられない、と分かっているにもかかわらず手を伸ばした。

鈍い音がした。天子が背中から剣の柄に落ちた。苦しそうに、ほんの少しだけ、呻き声を上げた。落ちた瞬間、目を見開いていたが、すぐに目を閉じてしまった。

私もメデイスンも声が出なかった。もとい、出せなかった。目の前で起こったこと、あまりの非現実さと残酷さに愕然としていたのだ。

死んでしまったのだろうか……？この距離じゃ、息をしているか分からない。

「はい、おしまい。大丈夫、死んでないわよ。そんな辛気臭い顔しないで」

それを聞いて、少しだけ肩を撫で下ろせた。死んでいなくて良かった。しかし、よく考えると、八雲紫が私たちに直接手を掛けないはずだ。あれだけ緻密にルールを練り上げているのだ、彼女自身が手を掛けてしまつては全く意味を為さない。

「……分かったわよ、返してあげるわよ」

八雲紫はまじまじと私たちの顔を眺めた後、剣をメデイスンの方に振って天子を投げ

飛ばした。

飛んできた天子を受け止めることが出来ず、メデイスンはもろとも吹き飛んでしまった。

「メデイスン！」と叫んだ頃には、既にメデイスンは天子の下敷きになっていた。

「それじゃあね。ちゃんと手当てしてあげなさいよ」と言い残して、八雲紫は天子の落ちてきた裂け目に吸い込まれていった。

「霊夢ー。天子どけてよおー、動けないー……」

深い深い悔しさと怒りと情けなさの中に溺れていた私を、メデイスンの声が現実に取り戻した。

「あ……ごめん。今助けるわー」

天子を一旦ベッドの上に寝かせた。今すぐに目を覚ます様子は見られない。

二人の間に会話が生じなかった。この部屋の中に恐怖と絶望が渦巻いていた。圧倒的な力への恐怖。そして、少しでもあの女に敵うと思っていた反動による絶望。

「天子……どうする？」先に口を開いたのは、メデイスンだった。

「今は、寝かせておきましょう。私たちは探索を続けなくちゃならないわ。……あんなの見せられちゃ、ね」

「同意見よ。それじゃ探索を続けましょう。天子はまた後で向かいに来ましようか」

私とメデイスンは、天子の部屋を後にした。八雲紫に対する敵対心をより強くして。

四人寄れば最高の知恵

私は、部屋を出た後から心の中にある感情が渦巻いていた。

怒り。八雲紫に対しての、沸々と込みあがってくる怒り。

天子が目の前で叩きのめされている時には、情けない話だが恐怖が私の心を支配していた。

しかし、今は違う。仲間が目の前で蹂躪されたのに怒らない訳にはいかない。もしかしたら、この怒りは自発的ではなく義務的な怒りなのかもしれない。

だけど……これは私自身の弱さと卑怯さを意味している。八雲紫が私の目の前にいないから、今現在私の近くにいないから、恐怖が消え失せて憤怒しているだけなのだ。

私は、非力だ。あの女にそれを植え付けられた。それが策だったのか、はたまた私が勝手にそう思い込んでいるだけなのか。

一矢報いてやる。私が非力だろうが卑怯者だろうが関係ない。

ウラギリモノを殺して、あの女に勝つ。そして、天子の言っていた通り『この茶番』を終わらせてやるんだ。

「霊夢ー？　なんでそんなに怖い顔してるの？」メデイスンが無邪気な声で話しかけていた。

「え……ああ、ごめん。考え事」

「そお？でも、ほんとに怖い顔してたよ。大丈夫？」そんなに私は強面だったんだろうか。

私は無理やり笑顔を作った。

「うん、大丈夫。探索を続けましょう。」

「もしかして、天子のこと？　大丈夫だよ、元氣出して」

それに対して、メデイスンはごく自然な笑顔で私を元氣づけてくれた。成り行きとはいえ、疑ってしまったことが非常に申し訳なく思われるほど、純粹無垢な笑顔だった。

「ありがとね。貴方の言った通り、天子のためにも探索を続けましょう」

廊下の奥に向かおうとしたその時、後ろから覇気のない声があった。

「おや、霊夢さんにメデイスンさん。……あら？天子さんは？」

声の主はさとりだった。その隣には星がいた。

「天子はちよつと体調不良で寝込んでるわ。それより2人はなんでここに？」

メデイスンが訊ねると星が丁寧に答えた。

「メデイスンさん達以外全員があのお不思議な冷蔵庫を含めたキッチンを調べていたんで

すが、さすがに人が多すぎると思いまして私とさとりさんとで個室を確認しに行こう、というわけです」

「星さんの仰った通りです。私、どうも人混みというのが苦手なので、無理にお願いして付いて来て頂いた次第です」

と、ここまで2人の会話を聴いていて一番最初に思ったことは堅苦しい2人だな。ということだ。

お互いに「さん」付けで呼び合っているし、敬語を使って話している。はつきり言つて、今の印象だけで言えばこの2人のウラギリモノの可能性は考えにくい。

冷蔵庫の報告の時に疑いの眼差しを向けたさとりも案外ウラギリモノじゃないのかもしれない。

反面、このタイプ、つまり星やさとりがウラギリモノだった場合は非常に厄介だ。

こういうタイプは大抵の場合が口八丁で、例え詭弁を話していたとしても説得力を持つために話の流れを掴まれてしまう。印象操作だってお手の物のはずだ。油断せずにあの2人を分析していかなくてはならない。

「もし差支えがなければですが、私とさとりさんも一緒に探索に行つてもよろしいですか?」

星の提案に、私はほんの少し思案する。この提案は乗るべきか?

4人で探索した時、もしこの中にウラギリモノがいたらどうなる？——おそらくだが、影響をきたすことはないだろう。3人の場合より監視の目が増えたことにより強固なお互いの見張り合いが可能はずだ。

星とさとりは怪しい人物か？——今のところは何とも言えない。だけど、念のために行動を共にして目を光らせておく必要性は十分にある。

つまり、同行はすべきだ。

はつきり言つて、こんなこと考えなくても断るといふ選択肢はなかった。なぜなら、断つてしまえば一気にメデイスン、星、さとりの3人から怪しまれることに疑いようがないからだ。

「ええ、いいわよ。じゃあ4人で行きましょうか」

私はできるだけ快諾した。考えていることを悟られないように。

突拍子もなく、星が何か思い出したような顔をした。

「あ、ちなみに私の部屋は一番手前側にありました。皆さん気付いていらつしやつたかもしれませんか」

そう言われて、この部屋だらけの廊下に来た時を思い出す。

確かにあった。「TORAMARU」とローマ字でドアノブに彫つてあったのも、向かいの部屋が布都だったのも思い出せる。

しかし、気になる点が一つある。なので、取り敢えず訊いてみることにした。

「星、貴方の部屋におかしなモノなかった？例えば、触ると記憶の一部が甦るような」

「それってもう答え言ってるようなものですよ。結論から言うところあります。槍です。あの槍を持つと、私の頭の中に『毘沙門天』という言葉が浮かび上がってきました。霊夢さん、あの不思議な物体の正体を知ってるんですか？」

八雲紫から聞いた情報を星に話した。

私が話し終えると、星は珍妙な顔をしていた。

「記憶の一部……ですか。何故そんな物が？」

ため息交じりに私は答えた。

「分かっていたら教えてるわよ。本当に何考えてるか分からないわね、八雲紫は」

対してさとりは全く動じていなかった。

「恐らくですが、私たちの均衡を揺るがすためじゃないでしょうか。断片的な記憶、武器としての価値、それぞれが違います。この不平等によって、各々にアクションを起こすキツカケを与えた……と言ったところじゃないでしょうか」

淡々と言つてのけた。納得させられてしまった。

頼りなさそうな顔つきをしているのに、鋭い。人は見かけによらないとはよく言つたものだ、と痛感した瞬間だった。

「なるほどねえ。八雲紫も色んなこと考えてるのね」メデイスンは感心したように言った。

さとりは目を閉じて静かに答えた。

「ただの私の憶測に過ぎません。ですので、一概に私の言っていることが正しいとは限りません」

それを聞いた星が少し考え込んだ。

「うーん……これ以上、ここで考えてもしょうがないですよ。さとりさんと霊夢さんの部屋に行ってみましょう」

私は「そうしましょ」と軽く同意して廊下の奥に歩を進めた。

眞贋見抜く心眼

天子の部屋を出て次の組、天子の部屋とは反対側に私の部屋があった。

今まで見てきた扉と変わるところは何一つない。強いて言うならば、ドアノブに「HAKUREI」と彫つてあることだけだ。

「私の部屋には人形、天子の部屋には剣、星の部屋には槍があつたわね。霊夢の部屋には何があるのかなあ」

メデイスンが何気なく呟く。

確かに気になる。あの女、八雲紫が言つたことから考えるに、各人の部屋にあつたモノは記憶があつたころの各々に深く関係しているはずだ。例えば、メデイスンだつたら人形屋の娘さん、だとか。しかしながら、天子や星の場合は予想しにくい。鍛冶職人の娘さんとかだろうか。

そして、この部屋には以前の私に関連しているモノのはずだ。触れれば記憶もほんの一部だけ甦る。それが、少し怖いようであり、楽しみようである。

何にせよ、見ないわけにはいかないのだ。あの女に一泡吹かせるためには何だつてやると決めたのだから。たとえ殺しても。

開けるわよ、と一声かけて返事を聞かないうちに私は扉を開けた。

瞬間、私の目を一際引くモノが部屋の中央に安置されていたのが見えた。思わず目を見開く。

幣だ。部屋の雰囲気とは全く合っていない。

しかし、それを見ると私の頭の中がグルグルとする。そして今度はもつと近づいて見てみたい、触ってみたいという欲求が湧いてくる。

私は欲求のままに幣に向かって走る。腹を空かせた猛獣のような勢いで。

後ろで誰かが何かを言っていたようだが、内容が耳に入ってこない。それ程までに私はあの幣に釘付けだった。

幣を拾い上げて、私の視線の高さまで持ち上げてみる。紙垂が顔にかかって少しくすぐつたい。

私は今、穴が開くほど幣を見つめている。その光景は異常だということは自覚さえ出来る。だけど、視線を外すことが出来ない。未来永劫このまま見続けたいとまで思ってしまうほどに。

見つめていると、私の頭の中がグルグルしていたが次第に何か形になっていく。文字になっていく。

「神社……」

私の意思に全く関係なく口から零れた。途端に、私の頭のモヤモヤが消え、幣に対するある種の狂気的な興味も失せてしまった。

「霊夢は『神社』かあ……。これまた意外ね」

部屋の外からメデイスンが驚嘆交じりに言った。

私に関連するモノが幣、そして出てきた言葉も『神社』と。私は記憶を失う前まではどこかの神社で巫女さんをやっていたということだろうか？

人形屋、鍛冶職人、そして巫女……。全く関連性が見出すことが出来ない。一体、私たちはどのような理由で集められたのだろうか？ただ無作為に抽出されただけなのだろうか？

星は小さく唸った後、不思議そうにつぶやいた。

「それにしても、この記憶を甦らせる不思議なモノは一体何なのでしょう。すこぶる気になりますね」

「用意したのは八雲紫のはずです。確実にあの女は只者じゃありませんね」さとりが答える。

メデイスンは困ったような表情でため息を吐く。

「それにモノを見た時に湧くあの恐ろしい気持ちは何なんだろうね。正直なところ、自分が怖くなっちゃった」

確かに、その通りだ。自分でも抑えきれない欲求が渾々沌々と湧き上がってくるあの衝動。はつきり言って、二度と味わいたくない。

「あんな気持ちに駆られるなら、誰か言ってくれば良かったのに」私はわざとらしく言った。

「私は既にメデイスンさんが教えていると思っていました」

「そもそもまだ部屋を見つけてません」

「面白そうだったから黙っていました。ごめんね」

文字通り三者三様に答えられてしまった。メデイスンの言い分には呆れざるを得ない。

私は先程のメデイスン以上に大きいため息を吐く。

「……もういいわよ。次はさとりの部屋に行きましょう。それでここにいる4人の部屋の探索が終わるでしょう?」

「ええ、その通りです。私も一刻も早く自分の記憶を一部だけでも取り戻したいので早く行きましょう」

さとりが微笑を浮かべてそう言った。初めてさとりの笑顔を見たような気がする。彼女に対する第一印象は『暗い少女』だったので、正直かなり驚いている。私が思っているより、さとりは暗い少女ではないのかもしれない。

「霊夢さんはこれ以上自分の部屋の探索しないでいいんですか？」星が私に訊ねた。

「ええ。多分全員の部屋の間取りは一緒だから大丈夫。もうメデイスンと天子の部屋を見たからね」

「それもそうですね。では、さとりさんの部屋に行きましようか」

私たちは部屋を出た。幣はしっかりとベッドの上に安置させておいた。

私の部屋を出た後、一番最初に口を開いたのはメデイスンだった。

「なーんか雰囲気为重苦しいわよねえ、ここは」

彼女が言った「ここ」とは、おそらくこの廊下のことだろう。

「確かにこの施設の中でも、より閉塞感がありますね……。『個室』というプライベートな空間の集まりだからでしょうか」

星の言うことには合点がいく。閉塞的にしておくことで各々の個人と集団のボーダーラインを張っている、という風に考えることも出来る。八雲紫の、私たちへの配慮なのだろうか。私たちに命を懸ける、と言ってるわりには、私たちの個人生活には介入しない体勢をとるようだ。あくまで、ゲームの完遂が目的、ということなのだろう。

「幸い、部屋に鍵もかけられるし、プライバシーは守られてるわけね」メデイスンは安堵の息を漏らした。

「プライベートと安全、ですね」さとりがそれに付け加えた。

「部屋にいる時に安全が確保されてるのは助かるわね。安心して寝られるもの」すると、星が口元に手を置いてクスクスと軽く笑った。

「霊夢さんって案外楽天的ですね」

丁度そう言われた時に次の扉を見つけた。私の部屋があつた方の扉のドアノブを確認すると、「KIRISAME」とあつた。ということとはここは魔理沙の部屋だろう。

「こっちはさとりの部屋じゃないわよー」私の代わりにメデイスンが背後にいるさとり
に報告した。

これで私の部屋の周辺の位置が把握できた。私の隣は魔理沙と…確か隣だった。向
かいは咲夜だった気がする。しっかり確認していないので確定は出来ないが、私の記憶
はそう言っている。ならば、そうなのだろう。

位置を確認することは非常に重要だろう。事件が起こった時には位置関係はとても
とても大切だ。

「……………こっちも私の部屋ではないですね。次の部屋に行ってみましょう」

魔理沙の部屋の向かいのドアノブを見た後、廊下の奥へゆつくり歩いて行つた。

メデイスンはさとりについて行きながら、星に訊ねた。

「ちなみに、そっちは誰のだった？」

「妖夢さんの部屋でしたよ」

「成程ね、ありがとう」

私はその会話を聞きながら、ふと考えていた。妖夢とはまだ関わっていないなあ、と。もしかしたら、関わる前に私か妖夢がいなくなってしまうかもしれない。妖夢に限らず、咲夜や布都など他の関わりが未だにない人物にも言える。それを防ぐためにも、他人とのコミュニケーションは積極的に取っていくのが吉だろう。記憶がなくなる以前の私たちに関わりがあつたのかもしれないが。

「私の部屋がありましたよ」決して大きくないがどこかずっしりと威厳のある声が廊下に響き渡った。

さとりは妖夢の部屋より1つ奥の扉の前に立っていた。どうやらそこが彼女の部屋らしい。

「先に入ってます」と言い残して足早に自分の部屋に入ってしまった。

「あ、ちよつと待ってよ!!」メデイスンは駆け足でさとりを追いかける。

星は私に微笑みかけた。

「私たちは歩いて追いつきましようか」

「星も意外と楽天的ね」

「お互い様ですよ」

和やかな雰囲気だった。心底、これが只の合宿のような催しだったと思う。怖いのは1点、星がウラギリモノだったら、ということだ。最初に信用を得させるターゲットを私に定めたまでのことなのかもしれない。現時点では情報が少なすぎる。取り敢えず全員と対等に話すしか他はない。情報を得てから追い詰めていけば良い。

私と星がさとりの部屋に着いた時には、既にさとりは部屋の中央で、手に持っているなにかをしつと見つめていた。あれは何だ？赤い眼の形をしたオブジェのようだが、名称が全く分からない。

直後、さとりが力を抜くように息を吐き出した。

『心』………………。これが、私に関するキーワードのようです」

「さとりさんのキーワードは『心』ですか………………。それより気になるのですが、それは一体何なのですか？」

「これですか。私自身にもよく分かりません。名前すら分かりません。ですので、思い出せるときが来るまで私は『サードアイ』と呼ぶことにしました」

「サードアイ、ですか。それはまた何故ですか？」

さとりは自分のまぶたをトントンと2回軽く指先で叩いた。

「この通り、私には既に2つ、眼があります。ですので、安直ですが第三の眼ということ

でそう名付けました」

メデイスンが何度も首を縦に振って、興味深そうにそれを聴いていた。

「それいいわね。じゃあ私もあの人形に名前でも付けようかしら。『セカンドミー』とかどう？」

「人形にそんな名前付けるのはどうかと思うわよ……」私はツツコまずにはいられなかった。

「え、そう？ わざわざ名前付ける必要もないのかしら、やつぱり」

「さとりみたいにモノに名前付けるなんて稀有なんじゃない？」

すると、さとりは恥ずかしそうに微笑んだ。

「……私にもよく分からないのですが、これを見た瞬間にインスピレーションが湧いたのです。」

もしかしたら、過去の私の記憶なのかもしれないですね」

八雲紫は確かに言った。私たちの記憶を蘇らせるためのヒントだと。そしてそれは個人差があるのかもしれない。さとりはインスピレーションが湧いた、と言っているがさとの記憶の片鱗がそうさせたのかもしれない。変な話、メデイスンの『セカンドミー』とやらも合ってるのかもしれない。そうだったら、ネーミングセンスは疑わざるを得ないが。誰か一人でも記憶が戻ってくればウラギリモノだって分かるかもしれない

ない。したがって、さとりには一種の期待を抱いてしまう。抱かざるを得ないのだ、八雲紫に勝つために。

「とりあえずここにいる4人の部屋の探索は終わったわね。次はどこに行くんだったけ？」メデイスンが首をかしげる。

「私たちはこれから凶器室に行くつもりだったんだけど……星とさとりは？」

星はあまり乗り気じゃないようだ。目は口ほどにもものを言うとはよく言ったものだ。

さとりはその様子を名前通りに覚ったようだ。

「私たちはこの後は保健室の調査をするつもりでした。どうやら、ここで一旦お別れのようですね」

私は1度、深く頷いた。

「分かったわ。それじゃ頑張つてね」

さとりは少しだけ口元を緩めた。

「ええ、勿論。霊夢さんたちも気を付けて」

未知なるルナティックウエボン

個室のあつた部屋から出ると、浴場から布都と咲夜が出てくるのが見えた。入浴していた訳ではないようだ。

「甘い物が食べたい」とか「私の舌は肥えているぞ?」とか話しているのは布都の方だ。どういふわけか自慢げに話している。ニコニコしながら彼女の話を聴いている咲夜がこちらに気付いた。

「あら? そつちは個室でしたっけ?」

「ええ、浴場には何か怪しいモノはあつた?」私は訊いた。

「いいえ。至つて普通の浴場でしたわ。強いて言うなら、とても良い設備でした。怪しいほどに。」

「そんな怪しき要らないわよ」あつさりとしてメディスンに突つ込まれていた。

私たちの声に気付いて、布都がこちらを振り返つた。

「おお、霊夢殿にメディスン殿ではないか」

「私もメディスンも『殿』付けて呼ばれるような身分じゃないわよ」

「しかし、どうも付けないと私の気が済まぬのだ……。以前の我は一体、どんな

人物だったのだろうか……」

「もしかして、布都って違う時代の人なのかもね」とメディスンは冗談交じりに言った。

確かに布都だけ18人の中でも異色の存在だ。というのも、見た目や一人称が古いのだ。彼女の一人称は「我」だし、烏帽子も被っている。名字も「物部」といかにも古風だ。もしかしたら、彼女は飛鳥時代とか奈良時代からタイムスリップしてきたんじゃないだろうか。突然殺し合いさせられたり、異様な裂け目から出たり入ったりする女もいるくらいだ。タイムスリップという不可解なことが起こっても何らおかしくはないだろう。

「うむう……確かにそうかもしれないぬ。それが真実を確かめるためにも、我はここを生きて出る。おぬしらには悪いがな」

シリアスな空気が流れた。この4人が誰も最後には生きていないのかもしれないのだ。その緊張感と不安感とその空気を作りだしているのは明白だ。ただ、こう言っただけで失礼だが、この空気になるのは唐突すぎる気がする。むしろ、このタイミングではないと思う。はつきり言って、あんまり空気を読めてない。

「なるようにしかありませんわ。いくら気負ったって運命は変わらないのよ」

「咲夜殿、厭世観でもお持ちなのかな？ 変わらないから運命じゃない、変わるから運命な

のだと思うが？」

咲夜が腕を組んで少し考えた後、余裕たつぷりと言った表情で答えた。

「貴方に言いたいことが2つあります。まず1つ、私は厭世観を持ってません。貴方と同様に私もここを生きて出たいと思ってます。そして2つ、私も運命は変えられる物である前提で話しています」

それを聴いた布都が驚いた表情を見せた。

「そ、そうであつたのか。釈迦に説法してしまつたというわけか。何とも恥ずかしい……」と言つた後には赤面していた。

遠回しに馬鹿にされているのには気づいてないんだなあ、と思いながら私はその光景を見ていた。

メデイスンが若干呆れてるような声で言つた。

「それはどうでもいいんだけどさあ。私と霊夢はこれから凶器室に行こうと思つてるんだけど、布都と咲夜はどうする？」

「我々には崇高な目的がある。悪いが同行することは出来ぬ。」

「崇高、なんて言ってますが布都さんが単に甘いものが食べたいってだけなんですけどね」

私は先程の布都と咲夜の会話を思い出す。厭世観がどうのこうのという会話より前

の会話だ。

「確かに言つてたわね。そんなこと」

「如何にも。このような慣れない環境に疲れてしまつてな」

「……分かつたわ。私たちだけで行きましよう、霊夢」

メデイスンはそう言うのと、再び凶器室に向かつて歩き出した。

個人的にはこの2人と行動を共にしたかった。私的に最も疑わしい咲夜の行動を見ておきたかつたからだ。しかし、あのように言っている以上、無理に誘うとこちらが疑われてしまう。ここは一旦引くとしよう。

「それじゃ私たちは凶器室に行くわ。また後でね」

咲夜に軽く挨拶してメデイスンの後を追った。

「危険な場所です、十二分に注意を払ってくださいね」

中央のホールまで辿り着くと、体育館の方から鈴仙と燐がやってきた。

「あれ、お姉さんたち。調査の途中かい？」

燐がニコニコしながら話しかけてきた。

見る度に思うが、この2人には何か足りない。一体何が足りないのだろうか。化粧？
服装？アクセサリー？どれもそうであるようでもあり、そうでないようでもある。

「ええ、そうよ。貴方たちは？」

メデイスンは燐に負けず劣らずニコニコしながら訊き返した。

「あたいたちは今さつき体育館の調査を終わらせてきたところだよ。私はさつきの3人
ずつの調査の時も来たんだけど、鈴仙のお姉さんからお誘いがあつてね」

鈴仙が話を聴きながら、長い薄紫色の髪を指をつまんで弄っている。

「私たちが最初に集まつたのが体育館だったから、何かあるんじゃないかと思つて調
べたのよ。だけどあつたのはスポーツ用具だけだったわ」

口調から察するに、不貞腐れてるのではなく見つからなくてシヨックだった気持ちの
方が強いようだ。

「ふーん……まあ、一回調査されてる場所だし、なかなか新しいモノを見つけることはな
いんじゃないのお？」

メデイスンは目を瞑つて考え込みながら呟いた。

その発言の少し後、突然、燐が手をパンと叩き、「そうだ」と何か思いついたようだつ
た。

「霊夢のお姉さんたちはこれからどこに行くんだい？ 何ならあたいたちも同行する
よ」

「私たちはこれから凶器室に行くつもりなんだけど、来る？」

「行く行く！ あたしも行ってみたいと思つたし！ 鈴仙のお姉さんも良いよね？」

燐に訊ねられた鈴仙は髪を弄るのをピタリと止め、私たちの方を見た。

「勿論良いわ。私も行って見たかったところだし」

「決まりね！ じゃあ凶器室まで競争！」

と言いつ残して、メデイスンはダツシユした。

「あ！待つてよ、メデイのお姉さん！」

燐はその後を追跡する。すぐにメデイスンを追い抜いてしまった。

一方の鈴仙は、特に追いかける様子もなくゆつくりと歩いた。勿論私も。

取り敢えず日常会話でもしようかな、とふと思つた。そういえばここに来てからしてない。日常会話のような小休止でも入れないとやってられない。

「鈴仙は疲れてる？」

「そこそこね」

「あの2人は元気ねえ」

「燐とメデイスンのこと？ 燐はとにかく元気ね。体力が有り余つてるみたいに」

「それならメデイスンもかなあ。だけど、一緒にいて疲れるつてことはないわね。むしろ、こつちが元気貰うくらい」

「あー……それは確かにあるかも」

「そういう人がウラギリモノだと怖いよね」

「霊夢だった時の場合も怖いけどね」

「私がウラギリモノだと思ってる？」

「そこそこね」

会話していると凶器室に着いた。扉は開きっぱなしになっているところを見ると、メ
デイスンと燐はもう中にいるようだ。

それにしても、部屋の前に立つだけで気持ち悪い空気を感ずる。生温かくて纏わりつ
くような空気だ。異常なまでの不快感を覚える。正直なところ、部屋に入りたくない。
調査の必要がないのなら入らないだろう。こんな部屋に入りたがる人なんていないだ
ろう。強いて言うなら、天邪鬼な人くらいだ。

とは言っても、部屋の前でいつまでもこうしてるわけにもいかない。このゲームに勝
つために、八雲紫に一矢報いるために調査はしなくてはならない。

強く決心したことも相まって、私と鈴仙は無言で凶器室に入った。鈴仙が何を思っ
たか分からないけど。

部屋に入ると、廊下の雰囲気とは違う暗さがあった。廊下は、言うなればムーディー
な気持ち悪さがあった。何故なら、廊下の電灯は全て紫色だからだ。それに比べて、こ

の凶器室の暗さはストレートに気持ち悪い。おぞましい、と言い換えた方が伝わりやすいかもしれない。

コンクリートの壁と床の無機質さが気味の悪さを引き立てている。何故ここだけコンクリートで囲われているのだろうか？

さらに視界に入ってくるのが、床に無造作で乱暴に置かれている凶器。銃殺するための拳銃や撲殺するためのハンマー、刺殺するための包丁は剣と言っても過言ではないほどの長い刃のものや、デザートナイフくらいの短い刃のものまで揃っている。他にも、ボウガンや紐、何か入っている瓶なんかも置いてある。というより落ちている。凶器専門家ではないので語弊があるかもしれないが、保存状態はどれも最悪だ。しかし、何故かどの凶器も埃を被っていない。相変わらずこの施設には謎が多い。

メデイスンと燐はこちらに背を向けて、何かをじつと見ている。「これ何？」とか「というかこれ凶器？」というような話声が聞こえてくる。

「おーい、何見てんのー？」と私はその2人に呼びかける。

2人が私の声に反応してこちらに振り向く。

「ねえ、霊夢のお姉さん。これ何かわかるかい？」と言って燐がこちらにそこまで大きくない直方体の鉄の塊を投げ渡してきた。

私は慌てて落としそうになりながらもなんとかキャッチした。

掴んだ鉄の塊は手にスッポリと収まるサイズで、横に割れ目が入っていた。どうやら、開くようだ。開いてみると、縦長の形になった。上の面には液晶の画面、下の面には数字やらおかしげなマークが書いてあるボタンが沢山あった。どう見てもこれは凶器じゃない。そもそも名称が分からない。

「うーん……分からないわ。鈴仙は？」

私の横でこの鉄塊を見ていた鈴仙も首をかしげていた。

「だよねえ……。ごめん、私たちにも分からないわ」

「お姉さんたちでもダメか。じゃあその意味の分からないモノは霊夢のお姉さん持つてよ」

「え、嘘でしょ？ これ凶器かもしれないのに私携帯してて大丈夫かな」

「あらかた私たちそれ弄ってみたし、大丈夫じゃないかな。ほらほら、取りあえず持つといてよ」とメデイスンが軽く言う。本当に大丈夫かなあ。メデイスンに言われるがままに、鉄塊をスカートのポケットに入れた。

「あー。正直なところ、もう私この部屋出たいんだよねえ。気持ち悪くてさ、空気が」とメデイスンが顔をしかめながら言った。

私はそれに頷き、肯定した。

「確かに。私ももう気持ち悪いから出ようと思ってたわ」

「そう？じゃあもう出ようよ。でも、霊夢全然この探索してないけど大丈夫？」

「多分だけど、これ以上目ぼしいものは出てこないと思うのよね。完全に私の勘なんだけど」

「第六感も意外と大事だからね、信じてみるのも手だと思うよ。じゃ、ここ出よう出よう」

そう言い残して、メデイスンは足早にこの部屋を出ていった。

「私と燐は引き続きこの探索するわ。何かあったら呼びに来てね」

鈴仙が部屋の角で何かの凶器を調べながら、私に言った。

「え。あたかもこの部屋残るの!？」

「私にここを1人で調べる度胸はないわ。1人だと疑われるしね」

「えー。ならパパッと終わらせておくれよ」燐は露骨に落胆した。

「ということだから。また後で会いましょう、霊夢」こちらを見ることなく、言ってきた。どうやら、拳銃を調べているようだ。

「ええ、気を付けてね」と言つて私は凶器室をそそくさと出た。出た後で凶器室からは耳がなんとか、と聞こえてきた。特に興味も湧かなかつたので部屋に戻ることはなかった。

しかし、ここで一つ困ったことが起こつた。メデイスンを見失ってしまった。

どうしたものでしょうか。メデイスンにもしかして一大事があったのかも知れない。一旦、食堂に戻るのが得策でしょうか。……そうしよう。下手に行動して私が殺されてしまったら元も子もない。

私は食堂へ戻ることにした。

思慮の渦、疑惑の波、推測の岸

「メデイスーン。おーい」

怠そうに声を出しながら薄暗い廊下を歩いて行く。そこまで大きくない私の声が廊下中を反響する。紫色と反響のコントラストは全くもって生産性がない。むしろ不愉快だ。廊下を照らす紫色はどうも私にやる気を起こさせない。私は紫色が嫌いなのか。こんな電灯なら、無いほうが活気が出てくる。「紫」といえば八雲紫が連想される。だからなのかもしれない。

食堂に向かう途中、保健室を通り過ぎたところで丁度扉が開いた。

「おや、霊夢さん。……お一人ですか？」

さとりと星が保健室から現れた。相変わらず抑揚のない声だ。

「メデイスンさんは何処にいらっしやるんですか？」と言うなり、星は辺りをキョロキョロと見回した。

私はさとりと星にメデイスンがいなくなったことを伝えた。

それを聴いて、星は慌てふためいた。

「え!? それって大変な状況なんじゃ? メデイスンさんに何かあったりでもしたら

……！」

その一方で、さとりは人差し指を自分の額に当て、不敵に笑んだ。どうやら、何か思いついたらしい。

「メデイスンさんがそのような状況に陥っている、あるいはその逆が起こっている可能性はほぼゼロでしょう」

「どうしてそんなことが言い切れるんです？」

さとりは目を閉じて語りはじめた。

「それぞれの部屋の位置関係を思い出して下さい。ここ保健室と食堂は西側に位置しています。霊夢さんは北側に位置する凶器室からここに来ました。東側の体育館では、おそらくまだチルノさんと妖夢さんが探索をしてるはずですよ。そして、南側からは……」
と言ったところで、ホールの方向から雷鼓と水蜜が現れた。

「廊下のご真ん中で一体どうしたの？」と雷鼓は不思議そうに訊ねた。

さとりは今現れた2人をまじまじと見つめた後、再び小さく微笑んだ。

「今、お二人は南側から来られましたね？」

水蜜が少し考えるような素振りを見せた。

「南側……ああ、はい。確かに私たちは個室から来ましたが、それがどうかしましたか？」

水蜜の言葉を聴いて、さとりはここぞとばかりに自慢げな顔になった。まるで布都のようだ。

「これで、お分かりになったと思います。メディスンさんは食堂にいるはずですよ。」

さとりの洞察力には感服せざるを得ない。少量の情報からの確に推測し、ここまでの結論に至れるとは。しかも、説得力があり、反論の隙が見当たらない。

ただ、一点だけ解せないことがあった。

「一つ。訊いていいかしら？」

さとりは質問に返答することなく、私に静かに人差し指を向けてきた。

「『どうやって雷鼓と水蜜が南側から来たって知ったの？』……ですよね？」

言い当てられてしまった。まさしくその通りだ。だが、何故か私もたじろぐことなく話を続けた。

「ええ、教えてくれる？」

「特別おかしげたことはしてませんし、見てません。水蜜さんのスカートの裾を見て下さい。少し濡れてますよね？」

水蜜のスカートに目をやると、確かに裾の端の色が変わっていた。しかし、スカートが濡れる場所なんて——

『スカートが濡れる場所なんていくらでもある』ですか？ よくよく考えると濡れる場

所は限られてます。個室と浴場、それと食堂くらいです。あとは消去法で食堂で濡れた可能性が消えますので、残るは個室と浴場です。その2つはどちらも南側に位置しているので、雷鼓さんと水蜜さんが南側からやって来たのだと分かりました」

「だから、メデイスンは食堂にいる、つてわけね」雷鼓が薄らと笑みを浮かべながら呟いた。

その通りです、とさとりが答えた。

「というか、メデイスンのことが知りたかったら、そんな回りくどいことしないで最初から私たちに訊けば良かったのに。私と水蜜は食堂の方に向かうメデイスンを見たわよね、水蜜？」

はい、と水蜜が首を縦に振った。

雷鼓はさらに話を続ける。

「しかも、貴方の推測には穴があったわ。『水蜜のスカートの裾が濡れている。濡れるような場所は3ヶ所、そのうち食堂は位置的にあり得ないので、浴場か個室で濡らしたはず』、ここまでは合ってるわ。だけど、『水蜜のスカートが濡れたのは、さつき個室を調べた時である』ことが証明されてない。もしかしたら、全員が食堂に集まった時だったのかもしれない。その点、如何かしら？」

さとりは面白くなさそうに指で髪を弄っている。

「……考え中です」

私はただただ感服してるだけだった。先程まで、私は佇まいや言動などからのイメージで、さとりこそがこのメンバーの中で最も洞察力に秀でている人物だと思っていた。雷鼓もまた洞察力や説得力の点に長けていたのだ。かくもイメージとは当てにならないものだ。

私はさとりや雷鼓、他の高い知識や鋭さを有する者たちと渡り合えるのだろうか。

「兎に角、食堂に行きましょ。メデイスンに用があるみたいだし」

雷鼓が私たちの前を通り過ぎて、食堂に歩いて行った。

私は彼女の横顔にどこか恐怖とも嫌悪とも言い難いネガティブな印象を覚えたような気がした。

食堂に入って初めに目に入ったのが、正邪や布都と談笑しているメデイスンだった。神妙な顔つきで入って来た私に気が付いたようで、メデイスンは私に向かってあまりにこやかに手を振っていた。

その光景を見て、思わず深いため息をついてしまった。

「ちよつとメデイスン。勝手に一人で行動しないでよ。心配したんだから」

「ごめんねー。あの部屋入ったら、気分もちよつと悪くなっちゃって。さっさとあの部

屋から離れたくて勝手に食堂まで来ちゃった。悪かったと思ってるよー」言ってることと反して、メデイスンに悪びれる様子が見られない。彼女はいつもそうだ。

「もういいわよ。何事もなかったんだし」

すると、メデイスンの隣で紅茶か何かを飲んでいた正邪がカップをソーサーに置いた。嫌に笑っている。

「本当にそうなのかあ？ 少なくとも、コイツが一人になった時間があつたんだよ。一概に、何事も無かつたとは言えない。逆を言うなら、何かあつたら十中八九メデイスンの仕業ってわけだ」

特に焦るような素振りを見せることなく、メデイスンは正邪の手元にあつたカステラをつまんで口に入れた。

「大丈夫よー。私はただ食堂に来ただけだから、何にも起こらないもんねー」

正邪の真意は何だったんだろうか。何故あんなことを言ったのだろう。自分が事件を起こして、それをメデイスンに被せようとしたのではないのだろうか。

駄目だ。焦りと不安から冷静さを欠いてしまっている。結論は急いではいけない。もっと深く、思考を進めなくては。

しかし、私自身疑心暗鬼になつてきているのが分かる。だんだんと八雲紫の策略に嵌りつつある。落ち着かないと本当に足をすくわれてしまう。

正邪は勝手に食べるな、と言つてメディスンの頭を軽く小突いた。微笑ましい。布都はその横にいながら意に介さずショートケーキにがつついている。卑しい。

「私も何か食べたいわ。冷蔵庫にあつたの？」その光景を見ていた雷鼓がキッチンに向かつて歩いて行つた。

すると、キッチンから慧音と咲夜がお盆を持って現れた。

「もうそろそろ皆さん来ると思つてましたわ」

「ちょうど10時半だ。小腹が空くころだから、皆集まるだろうと思つてな」

咲夜が紅茶、慧音がパウンドケーキをテーブルに置いた。しっかりと18人分ある。布都や正邪、メディスンにとってはおかわりというわけだ。

食堂に戻つて来た私たちも各々椅子に座つた。勿論、小腹が空いていたからだ。

「これつて咲夜さんたちが作つたんですか？」私の正面に座つた水蜜が咲夜に問いかけた。

「まさか。こんな焼き菓子作るとなると時間がかかります。私が時間でも操れない限り、こんな短時間で作るのは出来ません」咲夜が水蜜の隣に座つた。

それもそうですよね、と相槌を打つた水蜜がパウンドケーキをつまむと少し驚いた様子を見せた。

「冷たくない……ですね。冷蔵庫から出したんですよね？ にしては冷たくありません

ん。むしろ、適温ですよ」

冷蔵庫、というところの無限に食材の湧いて出る珍妙な箱だ。冷蔵庫と呼ぶには、おぞましい。

私もチョコソースのかかったパウンドケーキを試しにつまんでみると、確かに冷たくない。そのまま口に運んだが、中まで適温だ。

咲夜がティーカップから口を離して不思議そうに話した。

「また謎が増えたのよ。あの冷蔵庫、取り出す食材全てがそのパウンドケーキみたいに適温なんです。例えば、牛乳。試しに飲んでみようと思って取り出したら冷たく、ホットミルクを飲みたいと思いつつ取り出せばなんと温かいんです。技術が最先端なんでしょうか」

技術、という言葉で片づけられるのだろうか。人の心を読んで、返答と言わんばかりに求めているモノを出す。これじゃまるで妖怪だ。機械が人の心を読めるとは到底考えにくい。所詮、機械は機械だ。血の通わないモノに血の通う者のことは理解し得ない。そう考えると、八雲紫も人間じゃないかもしれない。むしろ、人間と考える方がおかしいか。あの女は何もかも非常識だ。

水蜜が不思議そうな顔して2つ目のパウンドケーキをつまんだその時に、何か思い出したようだ。

「そういえば、個室にあるダンスにも信じがたい仕掛けが施されてましたよ。私の部屋と雷鼓さんの部屋で調べたのですが、ダンスの中の衣類を荒らして引き出しを閉じると元の綺麗な状態に戻ってたんです」

これには咲夜も驚いたようで、そうなんですかと感嘆していた。

「お気に召したかしら？　用意するのに随分苦労したのよ？」

ヒンヤリとした声が聞こえた。八雲紫だ。

食堂にいる全員がどよめく。私たちの見える範囲では八雲紫の姿は見えない。体育館や天子の部屋の時もそうだったが、あの女は何処から現れ、何処に消えるのか分からない。神出鬼没ここに極まれり、と言ったところだろう。

「気を付けて。あの女は普通じゃあり得ないような場所からでも出て来るわよ」私は注意を仰いだ。天子のような被害者を出したくないからだ。

「さあ、私は何処でしょう？　当てられるかしら？」相変わらず方向がうやむやにされている声だ。近いようであり、遠いようでもある。

テーブルや椅子の下などあらゆる探した後、メデイスンが諦めたように小さく肩を竦めた。どうやら、降参らしい。

「茶番はもういいわよおー。用があるなら、早く出ていらっしやいよー」

私を含め、他の者全員もかくれんぼにはお手上げ状態だった。

「これなら、分かるかしら？」

今度の声は方向が分かった。キッチンの方だ。しかも、少しこもっているようだった。

私たちはテーブルから離れ、キッチンに足早に向かう。皆、直感で冷蔵庫の前に立っていた。あの女独特の気味が悪くて、掴みどころのない雰囲気を感じたのだ。

「やっぱり分かっちゃうのね。正解よ」

突然、何の兆候も無しに冷蔵庫の野菜室が開いた。

鋭い冷気と共にゆったりとしたデザインの傘が出現した。無造作に開かれ、同時に嫌悪感すら覚える顔が、顔だけが滑り出た。

「タンズもこの冷蔵庫も、ここの施設の設備は全部一級品。貴方たちはどうかしら？」

「どうって……何がだ？ 我らがそれを使うのに相応しいかってことか？」 布都が純真無垢に訊ねた。

「いいえ。このゲームに勝てそうか、という意味よ」

「それはお主のさじ加減であろう？ 何なら、今この場でウラギリモノを教えてくれても良いのだぞ？」

「……貴方たち次第、ですわ」

布都の見え見えの企みを嘲笑したのか、あるいは何か他の理由があったのか、声には微笑が含まれていた。

「実力行使はダメよ。返り討ちどころか、殺されかねないわ」

今のメンツには血気盛んな人はいないだろうが、念には念を、私はもう一度注意した。

「……何の用なんですか？ 私たちの行動の偵察ですか？」

さとりが前髪を弄りながら、怠そうに八雲紫に訊いた。

それに対して、八雲紫が野菜室から片手を出現させ、さとりの真似をした。

「貴方、目的なく行動することはないのかしら？」

真似されたさとりは面白くないようで、髪の毛から手を離れた。

「少なくとも、この状況下なら私はしらないですね」

「私ならするわ。少なくともいから」

「何がですか？」

「……ウラギリモノ、かしら」八雲紫は口元を緩めた。それを聴いた私たち全員がどよめいた。

「お、おい。ちよつと待て。ウラギリモノは一人じゃないのか!？」正邪が焦って八雲紫に語調を強めて訊ねた。

「まさか。しつかり一人もいますわ。一人いれば十分です」

この女に嘲られると妙に癪に障る。腹ただしさだけがキッチンにベツタリと残る。険悪になった空気の中、私が切り出す。

「煽りに来ただけなら帰ってくれない？」

「まだ帰るわけには行かないわ、だって——」

話の最中に扉が開く音が聞こえた。キッチンからは食堂の扉が見えないが、声は聞こえる。

「あれえー？ 誰もいないの？」

「おかしいですねえ……。少なくとも、雷鼓さんと水蜜さんはいると思うんですがねえ……」

声の主は多分、天子と早苗だろう。天子の容体が少し心配だ。

「ほおら、来たわよ。鴨が蓮根背負ってきたわ」

それを聞いて勤が働いた。まさか八雲紫の目的は……

「おーい、いるんでしょー？」

天子がキッチンに顔を出した。野菜室の八雲紫を見た瞬間、顔色が変わった。

「八雲……紫!!」

「さっきぶり。元気だったかしら？」

天子の眼光が鋭くなった、殺気さえ感じる。嫌な予感しかしない。

「お陰様でね！」そう叫ぶと、天子はポケットからリボルバー式の拳銃を取り出した。

「今度こそ……！」天子が銃を八雲紫に向ける。

「天子、やめなさい。その女には敵わない。貴方は身をもって知ったはずよ」私は落ち着いた口調で天子を宥める。

「頼い！ あのままじゃ私のムカムカが収まんないのよ！」

八雲紫に一切の表情の変化がない。気味の悪い笑顔を浮かべつぱなしだ。

「何なのよ！ 何とか言ったらどうなのよ！」銃を構えている左手が少しずつ震え始めた。

「そうねえ、じゃあ一言だけ」

八雲紫はもう片方の手を野菜室から出して、扇子を開き、口元を隠した。

「無駄よ」

天子の手の震えが止まった。

「このっ……ふざけるな!!」

天子がトリガーを引く瞬間、時の流れが緩やかに感じられた。

キツチンに響き渡る銃声。漂う火薬の匂い。場にいる全員が息を飲んだ。

八雲紫の方に目を向けると、なんと首が後ろにのけ反っていた。

「や、やったー」天子は歓喜の声を上げた。

「ダメじゃない、勝ち誇っちゃ。ま、そうじゃなくてもダメだけどね」

のけ反っていた頭を元の位置に戻した。額にはあの不気味な裂け目がくつついていた。

じゃあ、裂け目に入っていた銃弾はどこへ……？恐らく、あの裂け目はある一点と別のもう一点を繋げる力があるはずだ。つまり、あの女は人であろうとモノであろうと瞬間移動させられる。体育館や天子での出来事から推測できる。言うまでも無く、今回のワープのスタートは八雲紫の額だ。なら、ゴールは……？

八雲紫は確か、天子が来た途端に鴨が蓮根を背負ってきた、と言っていた。蓮根とは恐らくあのリボルバー式の拳銃のことだろう。何故、あの段階で拳銃を所持しているのを知っていたかというのは現段階で判断の必要はない。

したがって、天子が目的だったことになる……じゃあ、もしかして銃弾のゴールは……！！

「天子、危ない!!」

私は思わず叫んでいた。推理の終着点に辿り着いた瞬間に。

だが、遅かった。

天子の後ろに不吉な裂け目が見えた。

スイミン・エクスプレス

「ほんのちよつとだけ、遅かったわね」

裂け目から銃弾の頭が出てくるのが見えた。もう間に合わない。

私は思わず目を背けた。

次の瞬間、聞こえてきたのは天子の呻き声や他の人の悲鳴ではなく、何か床に落ちた音だった。

「……あれ？ 天子が生きてる？」 雷鼓が驚きと安堵の色が声に混じっていた。

裂け目の下方に視線を移すと、本来なら天子の身体を貫いてるはずの弾丸が転がっていた。

何故だ？

私の推測では、裂け目は、ヒトやモノをある一点から任意の一点にワープさせる力があると思っていた。ならば、弾丸の勢いは決して減衰しないはずだ。しかし、現に弾丸は直進することもなく、裂け目から出た瞬間に落下した。

この事実から推測できることは、裂け目と裂け目の間には私たちには不可視の空間が

ある、ということだ。それならば、説明が付く。拙い推理かもしれないが、私はこの結論にしか至れない。

「自分で撃ったピストルの弾によつて命を落とす。まあまあ面白いけど、私が手を下すのはナンセンス。何回私に挑んだところで、貴方が勝つことは方に一つもありはしない。暇潰しの相手くらいにはしてあげるけどね」と言い捨てると、八雲紫は野菜室の中に潜つていった。それと同時に、天子の背後の裂け目も閉じた。

キッチンにいる殆どの人が深い深いため息を零した。私も例外じゃない。天子はというと冷たい床も意に介さずにへたり込んでいた。

「何なのよ……何なのよ、もう！」と叫ぶと天子は拳銃片手にキッチンを飛び出した。

誰も止めなかった。いや、止められなかった。頭に血が上っている人間は何をしでかすか分からない。だからこそ、止めるべきなのだが、やはり人間、増してやこんな状況なのだ、自分が一番可愛い。

「あ！ ちょっと天子さん、どこ行くんですか！」ただ一人、キッチンにはいなかった早苗だけが天子を制止しようとした。

「煩いー」という怒鳴り声の後、扉が開く音が聞こえた。食堂を出ていつてしまったようだ。

重苦しい空気がキッチンを覆っている最中、早苗が口をもごもごと動かしながら顔を

出した。

「どうしたんですか？ 何かあったんですか？」

「何を言っているのだ、さつきまでここに八雲紫がいたではないか」と布都が訝しげに言った。

「そうだったんですか？ ごめんなさい気づきませんでした」手に持っているパウンドケーキを口にしながらそう答えた。

「あー！ それ我のではないだろうな!？」

「どうでしょう、何せこれで最後ですからね〜」残っていたケーキを全部口の中に放り込んだ。

「よくも……よくも我の甘味を！」

「まあまあ。この冷蔵庫からは無限に食べ物が出てくるんだ。別にそれくらい構わないだろう？」 慧音は憤っている布都の肩に手を置き、優しく宥めた。

先程まで張りつめていた空気が幾分か和らいだ。しかし、野菜室にまだ八雲紫がいる気がしてならなかった。そうでなくても、あの冷蔵庫らしき化け物には近づきたくない。

洋菓子の甘ったるい匂いとあの女に対するもどかしく苦い各々の思念が充満する食

堂の時計は10時を指していた。朝なのか夜なのかは分からない。ただ、身体は夜だと叫んでる。慣れない環境とあり得ない出来事の連続で疲労がピークなのだ。

さまざまの要素の飽和状態にある食堂のイスに掛けている私は、目の前の空になったティーカップの底をただ見つめていた。やはり疲れているようだ。

「大丈夫ですか、霊夢さん。頼杖ついでる腕が崩れそうですよ」

私の隣に座っている星が心配そうな声を漏らした。隣に星がいたことも、私が頼杖ついでいたことも気付かなかった。

「……今日だけで色々起こり過ぎよ。知らない場所で知らないヤツに知らないヤツを殺せて言われたり。手品みたいなことする非常識なヤツに会ったり」

「そうですよね……。でも、今言ったの全部あの八雲紫のことでしたね」

「前言撤回。疲れたのはあの女のせい」

星の手元にあつたフルーツケーキのブルーベリーをつまみ上げた。毒々しく威張り散らしながらそびえていたのが、どこか八雲紫と重なった。

その時に、星があつ、と声を漏らしたが返す気にはならなかった。なれなかった。ちよつと不機嫌そうな表情を浮かべていたが、見てみぬフリをしておいた。

「無理もないですよ。誰でも疲れます、こんな状況下じゃ」

つまんだブルーベリーを少し弄る。圧を掛けてみても、みずみずしさを感ずることが

出来る。そこがまたどこか恨めしい。その紫を口に放り込んで、一種の妬ましさと共に嘔み碎いた。

「私には貴方がそんなに疲れてるようには見えないんだけどねえ……疲れてる？」
「疲れてますよお。ブドウ取られて疲労八倍です」

星は少し姿勢を悪くして疲れてる素振りを見せた。笑顔のままだけでも。

「……そう。私、もう寝たいから部屋に戻るわね。星はどうするの？」

「私はこのケーキを食べ終えたら寝ます。おやすみなさい。身体にはお気を付けて」

おやすみ、と挨拶し返して、私は立ち上がった。その直後から、瞼が途轍もなく重く感じられた。寝る準備は万端だ。

私は食堂を後にした。途中で慧音や水蜜、咲夜に挨拶されたが、眠気のせいでまともに返答できなかった。他にも誰かに声をかけられた気がするが覚えてない。睡眠欲とはヒトの欲の中で一番恐ろしい。睡眠不足に陥ると、判断力の低下を招く。この状況下では死活問題だ。

食堂の外は勿論、紫色の廊下が待ち構えている。眠くなると、この廊下の表情がどこか違って見える。それとなく重く、やや方向感覚を欠かせる。太陽と月を臨める窓は何処にもないのに、だ。何故だろうか。言わずもがな、眠気のせいである。

個室は確か南側、食堂が西側なので十字路の中央のホールを右に曲がると辿り着けるはずだ。

今の私の真正面には体育館がある。さとりの話だと……チルノと妖夢が探索していたらしい。眠い時ほど、記憶力は光るのかもしれない。まだ調査は続いているのだろうか？念のために確認しに行こうか？

そうとなったら行先変更だ。体育館經由寝室行き博麗は眠気と不安を燃料に進む。さつさと終点に着きたい、というのが私の本音だ。

体育館の大きな引き戸を開ける。廊下と体育館の両方にガラガラと大きな音が響き渡る。だが決して私の眠気を妨害することは出来ない。

廊下とは打って変わって、体育館内は眩い純粋な光に包まれている。その変化にすぐにはついていけず、目を細めざるを得ない。

ここに来るのは最初の集会以来だ。ステージには八雲紫も、その召使の尻尾の生えた女もいない。今までは八雲紫ばかり気になっていたが、あの八雲藍とかいう女は何者だろうか、ふと気になった。

まず、人間かどうかすら分からない。嫌でも目に入る妙にリアルな尻尾、帽子の下に隠れている獣の耳のような突起。まるで半獣だ。黄金色の尻尾から推測するに、獣だと

したら狐だ。尻尾の数は9本……だろうか。ならば、世に言う九尾の狐、というヤツだろうか。

非現実的すぎる。詳しくは知らないが、そんな妖怪やら伝承やらがこの世に存在しているはずがない。

ただ、完全に否定し切れないのは事実である。理由は簡単。八雲紫の存在だ。

あの女の引き起こす超常現象はこの世のモノとは思えない。しかし、この目でそれを見たのだ。有り得るはずの無い現象を。タネは無かった。それは絶対だ。何度も何度も見たのだから。

では、やはり八雲藍は人間じゃないのか？何故、人間じゃない者たちが催したこんなゲームに参加させられる？私たちは彼女らにとつてただの娯楽なのか？

……いや。この答えは今出したところで全くの無意味だ。増してや、いくら考えても出ないだろう。この答えを探すのは今じゃない。時が来るまで、この問題は心に留めておこう。

現在の目的は妖夢とチルノの安否確認だ。何か起こってからでは遅い。安心して寝るためにもさっさと任務遂行しなくては。

さとりはここで探索していた、と言っていたが本当だろうか。私をここにおびき寄せするためのワードトリックだったのだろうか？いや、あの場での嘘は苦しすぎる。雷鼓に

言い負かされていたあの時、説得力の顕示のチャンスだった時に嘘をつくにはリスクが高すぎる。

結論を出すには早計か。まず粗方探索してからでも遅くない。

この体育館にはステージとその横の器具室がある。私の記憶が確かならば、スポーツ器具しか無かったはずだ。それが普通なのだが、念のための自己への確認だ。さあ、探索を始めよう。

ステージも器具室もあつけらかんとしている。問うても何も答えてくれない。それはそうだ、生物じゃないのだから。2人がいるかどうかは自分で確かめるしかなかった。そして、答えは出た。いなかった。どうやら、もう他のどこかに行ってしまったようだ。

体育館の時計の長針は2に滞在している。考えてみれば、さよりの推理の時から30分程度経過しているのだ。だったら、この場にはない可能性の方が高いに決まっていた。

しかし、このような浅はかな思考が本番、学級裁判の場に持ち込まなくてホツとした。今のうちに気付くことが出来たのが救いだ。

兎にも角にも、この場には妖夢とチルノはいなかった。今重要なのはその一点だ。

体育館での目的は達成された。後は終着点、私の部屋のベッドに向かうだけだ。燃料の睡魔はさらに強烈になって私の速度を上げた。

特急博麗は予定通りに折り返し地点の体育館駅を通過した。ステージの上から視線を感じた気がした。

思い返すと、八雲紫は私たち、少なくとも私のことを知っているようだと分かる。廊下を歩きながらふと思った。

最初の集会の時、あの女は私に向かつて「さすが霊夢」のような趣旨のことを言いながら現れたのを覚えている。睡魔のせいでもそこまで鮮明な記憶ではない。

あの女は無作為に私たちを選んだわけではない……もしかしたら、私たち18人と八雲紫は大親友、元々仲良しだらけのクラスメイト、最悪アイドルグループのような集まりだったのかもしれない。言い方は悪いが、見た目が醜悪な部類が18人にはいない（私の私に対する評価は差し控えておくこととする）。

どこか引つかかる面もある。だとしたら何故私たちの記憶はない？今までの経緯から八雲紫が人間じゃない可能性も浮上している。そんな人外と私たちが友人以上の関係だったとはどうにも考えられない。私たちが人外でない限り。

あの女の目的は現時点では判断材料が足りなさ過ぎて分からない。今は考えないが

吉だろう。

心に思案を渦巻かせていると、だんだんと眠気が強まってきた。睡魔というのは文字通り「魔物」だ。身体の自由をじわじわと奪い、しまいには完全に身体を乗っ取られる。睡魔に乗っ取られてしまった人間の意識は身体から剥がされ、その魔物の生み出した、あらゆる感情が跋扈^{ばっこ}している精神世界に置き去りにされてしまう。不思議なことに、魔物は一定の時間が経過したのちにそこから意識を解放する。それは何故か？結論から言うと、愉悅を感じるためだ。睡魔の餌は実は自分自身の感情だ。人間の精神を乗っ取り身体を縛り上げたことで自らの中に生じた歪んだ忘我の感情を糧として生きている。自らの中に生じているのに「忘我」とはどこか矛盾しているような感触があるが、本質は違う。他からの影響によって生み出された感情に我は備わっていない。つまり、「忘我」という表現は誤りではない。だが、正解でもない。他からの感情とは言え、一度己に宿ると我は残る。間違っているわけでもなければ、正しいわけでもない。すなわち、睡魔とはパラドックスを糧に生きる魔物なのだ。

どうして私がここまで長々と深々と睡魔について強引な推論を立てているかと言うと、八雲紫が起因しているだろう。

あの女が私の心に面倒なまでにこびり付く。どうあっても八雲紫に結び付けようとしてしまう。今回の場合も例に漏れない。パラドックスを喰らう睡魔と常識で解しが

たい八雲紫。重なりそうで重ならない。辿り着けそうで辿り着けない。あの女にその境界線を弄られている気がしてならない。

だが、どうやら個と集の境界は自らで跨ぐことが出来るようだ。私は個室への扉をどこか勝ち誇った気分で開けた。

部屋の中にある廊下、どこか不思議な構造をしているこの場所も今は夜の静けさを満喫している。もつとも、ここでは昼も夜もなく静かだ。

廊下を軽く凱旋しながらドアを3つ、4つと追い抜いていくと私の部屋に辿り着く。こども部屋が陳列されているとどうも気分は良くない。物扱いされているようだ。さつきまでの良い気分をそれとなく害されてしまった。

ドアを開けて自室に突入する。帰還だったらどれほど良かったことだろう。

まず目に入るのがベッドの上の幣だ。あれを用意したのも勿論八雲紫だ。

……いや。寝る前なのだからもうあれこれ考えるのは止めよう。気分悪く眠りに着きたくはない。

ゆつくりとベッドに腰を沈めた。途端に疲れの波が押し寄せて来た。既に私はこれに抗うほどの気力を持ち合わせていなかった。幣を近くの机に乱暴に投げ飛ばして、身体全体をベッドに沈めた。まぶたがストーンと落ちた。私は睡魔に蝕まれてしまった。

私の意識がヤツの精神世界に閉じ込められつつあるようだ。不本意ながら、ここは睡魔に私の身を任せるとしよう。

すると、すぐに私の意識は暗く温かい意識の海にゆっくりと降下していった。

策動

見えない暁

気が付くと、私は雲海に浮いていた。この世の物とは思えない。いつそ恐ろしい。この雲から魔力さえ感じる。この柔肌そのものに意志が存在し私を放そうとしないようだ。一方の私も、このスポンジケーキを放したくない。快樂の永久機関をむざむざと手放す馬鹿なんていない。

私は既に新たな魔物に侵されていた。名付けるなら「快魔」か。基本的に誰かを依存状態に貶めるには飴と鞭。一度頂点に達させた後、徐々に墜落させていく。しまいには奈落の底だ。勿論、「奈落の底」とは平素に戻っただけなのだが、一度快樂を味わった者は元いた場所を嫌う。だから、一度地から足を離れた鳥は滅多に地に降りない。

ところが、快魔は違う。頂点から頂点、そして頂点から頂点へと恒常的な有頂天に常

に押し上げている。だから、天界に昇った天人は地になんて降りない。私がその天人なのだ。

そう考えると、天子は名前の通りに天人なのかもしれない。

謎の緋色の剣のメッセージ……「天人」。だが、あんなに墮落した天人なんているのだろうか。仮にそんなものの存在を認めたとしても、彼女が天人だとはまず思わないだろう。

気が付くと、私は曇天に沈んでいた。この世の物とは思えない。いつそ清々しい。この雲からは現実の凄みをありありと思いきらされる。

何事にも代えがたい現実が私の前に立ちはだかっていた。実は昨日までの摩訶不思議でドロドロした夢で、目を覚ましたらいつも通りの生活が始まっていて欲しかった。誰かを疑い、ある人物を憎み続ける日常的な非日常がリスタートする。それが嫌で嫌で

仕方なかった。

天界から地に足付けた私は閉まりかけの目をこする。まだ眠気が飛ばない。

チラチラと視界の隅に入る幣を手に取る。なんだこの小癪なオブリエクトは。眠さ千万の私にとってこんなもの、何故か湧き上がる怒りの矛先にしかならない。

幣と睨めっこしていると、次第に目が冴えてきた。怒りも冷えた。冷静になってもう一度よく幣を目視してみる。

突然、ふとこれを使ってみたい衝動に襲われた。しかし、幣なんてどう使う？

試しに両手で握る。そして右、左、右、左とそれぞれ2度ずつ振ってみた。しかし、何も起こらない。当たり前だ、これが正しい使い方だとは思ってない。巫女さんや神主のイメージの下での行動である。確証のないまま行動は起こさない方が良さだろう、何事も。そのうち、私は飽きてベッドの方へ放り投げた。

閉じようとするれば閉じられる視界の端に机が映った。意味なく気になって机の上を見渡してみると、鈍く光る金属が見えた。手に取ってみるとカギだった。

いったい何処の？この部屋の中にカギがついている物はない。消去法から考えて、このカギは部屋の鍵だ。今まで気づかなかつたが、部屋を出入りする扉のドアノブにカギが付いていた。盲点とは良く言ったものだ。何の装飾もないし、大きいわけでもないのに失くしそうなのが若干不安だ。丁寧にスカートのポケットにエスコートした。

そういえば、スカートのポケットに無機質な鉄塊を入れていたことを忘れていた。鉄塊をポケットから引っこ抜いて、再び弄ってみる。それを恥じらいも無く大きく開く。矢印のようなマークがあしらわれているボタン、数字が居座っているボタン、取っ手のような謎のオブジェクトが仁王立ちしているボタン、どれを押しても何も起こらない。その上の液晶にも反応はない。特定の場所や物体の近くでしか反応しないのだろうか。次第に鉄塊に対して呆れにも似た感情が湧いたので、再度ポケットに戻してあげた。

だんだん脳が覚醒してきた。昨日はすぐに眠りに落ちたせいで、着替えも歯磨きもしないことを思い出した。そうと分かると、だんだんどうしようもない不快感とえも言われぬ気持ち悪さが込み上げてきた。

今日の探索を始める前に身体を清めよう。私はタンスの引き出しから下着と新しい制服を取り出した。

個室から退出してカギをかける。スカートの鉄塊も入れているし、準備は万全だ。廊下は昨日と何一つ変わらない紫で充満していたが、気持ちはフレッシュだ。一度ゆつくりと大きく深呼吸を試みる。空気は不味くはない。

何の考えも無いがとりあえず食堂かな、と考えていると廊下の奥から扉を開ける音が

した。

音の方向を振り向くと、今すぐにも睡魔に侵されてしまいそうな顔をした正邪が錠錠していた。寝癖がひどく、特に前髪は垂直に天井を仰いでいた。

「おはよう、正邪。前髪ひどいわよ」

正邪の髪は特殊な色合いをしている。全体的に黒髪なのだが、前髪の一部、言うならば中央が赤く、それとは違つてところどころ白い部分もある。髪の色が3種類とはとても珍しい。星のようなダブルならばそこそこいるだろうが、彼女のようなトリプルはレアだ。シングルな私とは何かしらの格が違うのかもしれない。例えば、物凄くオシヤレさんである、とか。

「……眠いから口を開きたくない」と不機嫌な態度でカギを弄びながら私の横を通り過ぎて行つた。正邪は寝起きに機嫌が悪くなるタイプのようだ。

間近で見ると髪の変換具合は尋常じゃない。どれだけうつ伏せで寝たのだろうか。

「正邪も食堂？ 私も今から行くつもりだったのよ」正邪の横に並んだ。

彼女と未だに会話したことがなかった。眠気で梱包されているノーガードな彼女から情報を引き出すなら今しかないだろう。もしかしたら、ウラギリモノだと漏らしてくれるかもしれない。

「特に目的はない。……まあ、どうしても言うなら私も行くがね」裏のありそうな笑み

を私に投げつけた。

「まだ何にも言っていないけどね」

「……私には分かる。お前、何か企んでいるな？」意外にも正邪は私の凶星を突いてきた。

思わず動揺を表面に出すところだったが、何とか踏みとどまった。我ながらファインブレード。

いきなり私の急所に斬り込むとは偶然か？それともまさしく「目覚ましい」カンが誘発したのか？

「だったら、どうする？」咄嗟に当たり障りのない言葉が出てこなかった。

「ふふふ……。看破したからどうする、は問題じゃない。看破した事実そのものこそ重要。お前は私に見抜かれたことで多かれ少なかれ動揺したはずだ。そして、どこまで読まれているかも分からない。さあ、現時点で不利なのはどっちかな？」屈託の一切ない悪の顔が私の前で笑んだ。

「どこまで読めたの？全部？」私は恐る恐る訊いた。

「だったら、どうする？」正邪の顔には素晴らしい程良心の面影は無かった。

大丈夫、焦ることはない。ただ、相手から情報を抜き取ることに失敗したただけだ。ほんの少しの策略を看破されただけ……。増してやこんな会話だけで大どんでん返しが

起こるわけでもない。

そこから十字廊下に出て食堂に辿り着くまで私と正邪は口をきかなかつた。正確には、私が正邪に口をきけなかつた。これ以上会話をすると私の考えが全て見透かされてしまいそうな不安が閉口させた。正邪が口を開かなかつたのはわざとだ。一方の正邪は幾らでも平気に話せていただろう。だが敢えて、故意にそれをしなかつた。私の危惧をより煽るためだ。

完璧にしてやられたというわけだ。全く気持ちの悪い朝だ。

紫色はどんな時でも私の心を映し出す。調子の低迷も細かな気分の昂りも投影する。紫色はある種オールマイティな色彩なのだ。逆に言うならば特徴が無いのだ。個性の無い色には美しさは無い。美しさが無い色に存在価値は無い。とどのつまり、私はこの廊下が大嫌いだ。

食堂の前でも電灯は紫を発している。ヒトとして朝食は欲しくなるのだが、廊下にいるときは一切それが無くなる。気分を盛り下げこの施設には長居したくないものだ。

紫色への嫌悪と正邪への不信とも畏怖とも言えない微妙な気持ち私が私の中を行き

交っている最中、正邪が食堂の扉を開けた。

「あ、おはようございます。よく眠れました？」妖夢が空の皿とお椀を持って歩いてたのがまず目に入った。和食を食べたらしい。

「おはよう。そこそこってどこね。妖夢は？」

「私は快眠でした。ここのベッドすごくフカフカしてて気持ちいいですよね」妖夢は話しながらうつとりしていた。お気楽なものだ。

正邪は軽く鼻で笑った後、会話に参加せずに一番近くの椅子に座った。

そうね、と粗雑に相槌を打って会話を無理やり切り上げた。これ以上、ベッドの話をするとまた寝たくなるからだ。

私はそのままキッチンに向かった。食堂に充滿する芳しい香りは私の食欲をそれとなく促進させる。既に食堂にいた星も水蜜も慧音も談笑しながら食事を取っていた。咲夜に至っては、食事を終えていたようで食後の紅茶を楽しんでいた。

妖夢がシンクで食器を洗っているころ、私は冷蔵庫に心を読ませている。自分自身の手で好きな物を出したことがないので、未だ半信半疑だ。さて、見せてもらおうでしょう。心を読む魔の力を。

冷蔵庫の取っ手を力を入れて握った。朝食として今一番食べたいものを思い浮かべ、

両開きの扉を開ける。

すると、正面のスペースに一枚のお盆が佇んでいた。お盆の上には、見た目にも温かそうな御飯と長方形の皿に盛りつけられた焼き鮭に卵焼き、小皿のほうれん草の胡麻和え、さらには豆腐と長ネギのお味噌汁。まさしく私が思い描いた朝食そのものだ。

おそるおそるお盆を取り出して御飯の上に手をかざしてみた。まるで炊き立てかのような温もりが手に伝わった。

既にここに来てから様々な信じがたい現象を目の当たりにしてきた。故に驚きはそこまで大きくなかった。だが、全く驚かなかったわけでもない。あまりの不可解さにかけて放しの冷蔵庫の前で少しの間棒立ちになっていたほどの驚きはあった。食器を洗っている妖夢に冷気が少し肌寒いから扉を閉めてくれ、と指摘されるまでその状態だった。

そそくさと冷蔵庫の扉を閉めてキッチンを退出した。そしてすかさず楽しそうに談笑している慧音の隣に座った。正邪が座っている位置から一番遠かったからだ。

慧音のほか、共に談笑していた星と水蜜、紅茶を飲み終えた咲夜と挨拶を交わした。案の定、一番最初に食堂に来たのは咲夜らしく、他の3人は一緒に食堂に来たらしい。ちなみに3人が食堂に来た時、咲夜は自分が使った食器を洗っていたという。末恐ろし

い早起きだ。

「ところで、正邪と何かあったのか？」慧音が私にしか聞こえないような声で囁いた。

何故、と訊き返したが見当はついていない。一緒に食堂まで来たのにどこか険悪な雰囲気。私と正邪の間に漂っていたからだ。誰から見ても一目瞭然だったはずだ。

しかし、わざわざこの場で言うほどのことでもない。別に何があったわけではない、と言葉を濁した。慧音は私の答えに納得したわけではなかったが、それ以上は何も訊いてこなかった。

お味噌汁が冷めないうちに食べてしまおう、と重い箸を掴んだ……つもりが、お盆の上に箸がない。どうやら、箸を想像し忘れてたらしい。融通の利かない冷蔵庫だ。それくらい補完してくれればいいのに。意外と「魔」というのもたいしたことないものだ。

想像の埋め合わせに席を立った。早くしないと冷めてしまう。寝起きの私は割と飢えていた。

「どうした？」と慧音が訝しげに言った。先ほどの会話と関係していても思っただろうか。

「イメージを付け足しに」と寝ぼけた言葉を返した。

キッチンに再び足を踏み入れ、冷蔵庫とこの朝2度目の対峙。が、妖夢が水をさした。「食欲旺盛ですね」何とも間の抜けた言葉だった。

「……いや、ちよつと箸を」

「箸を食べるんですか!?」 どれだけ空腹だったら箸食べられるんですか!」

苦笑いするしかなかった。まさか妖夢が天然だったとは。

「違うわよ、箸がないから取りに来たのよ」

一瞬、妖夢に驚愕の表情が固着したのち、恥ずかしそうに笑んだ。

「そういうことでしたか。では、あの食器乾燥機の中に箸が入ってますよ」妖夢が指差したのはシンクの近くに置いてある鋼色の物体だった。あの物体にテーマをつけるとすれば「威風堂々」だ。何故だか分からないが偉そうに立っている。

「それなら大丈夫よ。ほら、冷蔵庫があるじゃない」

「食べ物以外のものが出てきますかね?」

「……それもそうね。じゃあ、素直にあそこから拝借させてもらうわ」私も相当寝ぼけてるらしい。目は冴えてるんだけどなあ。

私は偉そうで偉くない物体を開け、箸を取り出した。漆が塗ってあり、比類なき高級感を放っている。正直、使うのを一瞬躊躇ってしまふほどだ。

しかし、それと同時に気になることが2つ。1つ目は機械とはいえこんなに早く食器は乾燥するだろうか?この疑問は湧いたと同時に有力な推論が打ち立てられた。冷蔵庫と同じように魔の力を備えてると考えればいい。取るに足らない疑問だ、自分で挙げ

ておきながら。2つ目は箸が1膳しかなかったこと。妖夢が和食を食べたならば、必ず箸は使っている。だったら咲夜は洋食を食べたと考えればよい。しかし、この乾燥機の中を見る限り洋食器は入っていない。さつき自分の目で確かめた通り、冷蔵庫から自分がか心の中でイメージした食べ物を提供してくれる。「自分がイメージした食器」とともに。咲夜が洋食を食べたとするなら、洋食器が入ってなければおかしい。咲夜は本当に朝食をとったのか？

空腹の私の前にその疑惑は儼く散ってしまった。お味噌汁が私を呼んでいるのだ。私は気分を良くしてキッチンから出た。

途端に、私の眼に絶望が映った。

「よう、霊夢。元気か？ 生憎、私は元気澆刺だぜ」

元々、私が座っていた椅子に魔理沙が腰かけていた。それは格段問題ではない。私のお味噌汁が入っていたお椀を片手に持っているのだ。

「魔理沙……」

「あん？ 元気ないみたいだが、どうかしたか？」

「お味噌汁……」

魔理沙は不思議そうな顔してお椀を眺める。

「ああ、これか。なかなか美味しかったな。キノコの1種類や2種類入ってれば最高だったんだがな……ってあれ？ まさか、霊夢のか？」

一歩、魔理沙に歩み寄る。

「悪かったって！ 知らなかったんだよ、お前のだって」

「嘘つけ。食堂に来た時には、咲夜に訊ねてたじゃないか。『これ誰のだ？』ってなあ？」

正邪がニヤニヤしながら暴露した。

「お前っ……！ 要らないことを！」

もう一歩。

「これ冷蔵庫から出したんだろ？ だったらもう一回出せばいいじゃないか。だから落ち着けて」

「知ってた？ ヒトのイメージって崩れやすいのよ」

一度崩れてしまったイメージを何一つ変わらず元に戻すというのは難しい。私はあの一杯を楽しむにしていたのだ。

食べ物の恨みは恐ろしい。誰が言い始めたのか知らないけれど、私は大いに共感できる。

響かせ幸運、浴びせる咆哮

ご馳走様、と合掌。茶碗に米粒一粒残さず食べ尽した。正直な話、美味しかった。最初は恐る恐る箸を進めていたが、自然にそのペースが上がった。ここで生活するにあたって、食事に関しては問題は無さそうだ。

「魔理沙ー。これ洗っておいてね」

「何で私が……」私の隣でつまらなそうに私の食事を見ていた魔理沙が言った。

「ペナルティに決まってるじゃない」

「やーだね。あんなのでいちいち喰らってられるか」

「味噌汁喰らった人の台詞とは思えないわね。はい」魔理沙の前にお盆を置いた。

「私はそんなに大食らいじゃないぜ」そっぽを向いて嫌な態度を表して見せた。

「じゃあ、朝ごはん抜き」

「お前に決められる筋合いはない」

「素直にここで待ってたくせに」私はからかう口調で彼女の頬を軽くつついた。魔理沙は諦めたように微かに笑んだ。

味噌汁を食べられた後、私は魔理沙に1つのペナルティを課していた。私が食べ終わ

るまでは朝食をとってはいけない、と。半分冗談のつもりだったが、意外にも素直にもそれを聞き入れていた。彼女は変に愚直で、変にひねくれている。人間として、とても面白い性質の持ち主だ。

「それじゃ、豪華なモーニングと洒落込むか」魔理沙は目の前のお盆を持って立ち上がった。

「あれ？ 持って行ってくれるんだ」

ついでで、と得意げに言って立ち上がり、キッチンに歩いて行った。こういうところが彼女の面白いところだとつくづく思う。

ふと時計を見ると既に8時を回っていた。にも関わらず、一向に食堂の人数が増えない。既に起床しているものこのここに来ていないだけだろうか。我々18人には実はお寝坊さんが多いらしい。

生活リズムは非常に有力な情報になり得る。生活リズムにそぐわない行動を取っているとそれが一つの突破口にもなる。こんなことを考えなくてはならないのが不快でたまらない。

「暇ですよ、やっぱり」唐突に口を開いたのは水蜜だった。

「確かに。しかも18人もいるせいかな、この施設は実は窮屈だな」慧音が納得したように2度頷いた。

「今こそ窮屈だが、次第にそうじゃなくなる。最終的に広すぎるくらいになる」正邪が横槍を入れてきた。

「全部言わなくても分かるだろ？ 1つの事件で2人減る。それが倍々ゲームのように増えていく。16人、14人、12人：半分以下になった時点でさっきお前が言った台詞が貴重なものだと分かるだろう。その時にや、死んでるかもしれないがな」彼女は不謹慎に笑った。どうも正邪は倫理観が欠如している。というよりか、知っていて言っている風を感じる。人の嫌がることをしたいタイプのようだ。

場の空気は悪化した。正邪の嘲るような笑いと冷蔵庫の機械音だけが食堂に跋扈した。彼女以外は苦虫を噛み潰したような顔をしていた。

そのうち、魔理沙がキッチンから戻って来て、私の隣に座った。持っていたお盆をテーブルに慎重に置いて。お盆の上の料理に私は若干の違和感を覚えた。

「あれ？ 洋風料理じゃないんですね」私の疑問を星が代弁してくれた。

「そうだが？ 何で洋風だと思ったんだ？」魔理沙はキノコの入った混ぜ込みである御飯を口に運ぶ。

『モーニング』と言っていたので、つい」

「成程な。私は和食派だぜ。覚えておくといい」幸せそうにキノコ料理を頬張った。香ばしい芳醇な香りが私の鼻腔を刺激する。お昼はこれにしてみようかな。

「お前は何にも食べないのか？」魔理沙が正邪に向かって箸で指した。
「今はいい。そんな気分でもないからな」無愛想に言い捨てた。

ふーん、と相槌すると再び箸を進めた。

一方の食事を終えた私たちは特にすることもないので、目的もなくこの場に留まつていた。慧音と星は年寄りくさくお茶を啜り、水蜜と妖夢は呆然と空中を仰いでいる。咲夜はまだ紅茶の時間らしい。私も水蜜や妖夢と同じようにただ時計を眺めていた。

することが無い。そういえば体育館にスポーツ用具がある。あそこなら時間を有意義に潰せるだろうが、起き抜けに身体を動かすのは辛い。ちよつとした時間の潰し方が無い。退屈の一点に尽きる。

そんな時間の怠惰な粘着は突然打ち破られた。食堂の扉が開かれ、雷鼓と小鈴がずかずかと入ってきた。朝の挨拶を済ませた彼女らは楽しそうに会話しながら、キッチンの方へ向かつて行った。雷鼓は昨日と同じ髪型だったのに対し、小鈴は髪を留めておらず少しだけ後ろ髪がはねていた。

場が僅かに活気づいたような気がする。全員の表情が何となく和らいだように見える。

「あ、そういえば……」妖夢が何かを思い出したようにスカートのポケットをまさぐる。キッチンにいる2人を除く全員の視線が妖夢に集まる。

漸く取り出したのは四角い箱だった。蓋がガラスで中には白黒のモノクロ柄のカードが入っていた。

「見たことある気がするんですけど、名前を忘れてしまつて。何て言うんでしたっけ」その箱をテーブルの上にゆつくりと置いた。全員がその箱と睨めっこした。魔理沙も箸を止めていた。

確かに見覚えがある。誰かが使つていたような……いや、消えていた？ 思い出せない。これも記憶統制によるものか。

「トランプ、ですね。どこにあつたんですか？」 咲夜がカップをソーサーに置いた。

「そう、トランプ！ これは私の机の引き出しの中に入つてました。皆さんの机にはこういう物が入ってませんか？」

脳をひっくり返して思い返す。幣のような記憶を無理やり引き出される物体は部屋にあつた。勿論、この意味の引き出しではないだろう。妖夢の言っている引き出しを調べたかどうか記憶が曖昧だ。後で調べよう。

全員が首を横に振った。魔理沙は意に介さず箸を進めている。

「さつき問題になつた時間潰しが出来るわね。早速やりましょう。そうね……ババ抜きくらいが丁度いいかしら」

咲夜が妖夢にトランプを渡すように催促する。妖夢は箱をテーブル上に滑らせた。

このテーブルクロスは見た目に違わず滑りやすいようだ。咲夜がそれをキャッチすると箱からカードの山を取り出した。

慣れた手つきでその山をシャッフルしていく。あれは所謂リフル・シャッフルという手法だ。しかも空中で行っている。器用なものだ。ある程度シャッフルしたのち、片方の手で山を持ち一番上のカードを飛ばしてもう片方の手でキャッチした。描かれてあつた絵を見て、微かに嫌悪の表情を浮かべた。そして、そのカードを円卓の中心に滑らせた。私や慧音らはそのカードを覗き込む。JOKERとゴシックな字体で上下に反転して2つ書かれているカードの中央にはあの女、八雲紫が実物のように描かれていた。やはり気味の悪い笑顔を浮かべていた。全員が、咲夜が顔をしかめた理由が分かった。

「念のため、トランプの説明をしておきます。トランプはスペード、ハート、ダイヤ、クラブの4種類のスート、マークに各13枚の52枚、さらに2枚のジョーカーを加えた計54枚で構成されています。今から行うババ抜きとはその中からジョーカーを1枚抜いた53枚を使用します。これを順番に配っていく、同じ数字のカードをペアにして場に捨てていきます。自分の手札の中で捨てられるだけ捨てたら、次は隣の人の手札から1枚カードを引きます。これを繰り返し、最後に手札、つまりジョーカーが残っていた人の負けです」

長々と説明してもらったが、つまるところ運と相手の心を読むゲームだ。ある程度、今後の展開に通ずるわけだ。ゲームでまで腹の読み合いしたくはないが、単なるお遊びと考えて楽しむとしよう。八雲紫をこの殺人遊戯をゲームと称しているのは今だけ忘れよう。魔理沙は箸を進めている。

全員が咲夜の説明に了解したところでそれじゃ配りますよ、と言つて咲夜が妖夢の隣に座つた。位置が遠かつたらしい。

咲夜、妖夢、水蜜、星、慧音、私の順にカードを配つていく。さらさらと咲夜の指先を滑らかに伝つていくカードはまるで流れ行く川のように。他人を圧倒するその美麗さは咲夜の器用さを際立たせてくれる。

咲夜の手に山が無くなった時、私には8枚、それ以外には9枚のトランプが各々の手元に残つていた。

「えーと、どうすればいいんだつたっけ？」慧音がおかしな造形の帽子を弄る。

「まず自分の手札を見て、同じ数字の2枚をペアにして場に捨てるんです」咲夜は手札を見ながら早くも2枚引き抜いて円卓に投げ捨てた。

咲夜の動作を見て慧音も自分の手札を吟味し始めた。

私もぼやぼやしてられないので、手札を開く。右から順番にスペードの10、ダイヤの9、クラブの2、ハートの9、9が揃つたので場に捨てる。ハートの7、クラブの1

0、10が揃ったので場に捨てる。スピードの7、7が揃ったので場に捨てる。ハートの2、2が揃ったので場に捨てる。あれ？ 手札が無くなってしまうた。

「咲夜、私の手札無くなっちゃったんだけど」

「え？ 食べちゃいました？」軽くからかわれた。

「私はそんなに大食らいじゃないわよ。全部数字が合ってたからもう手札がないのよ」

咲夜は驚いていた。そんなに凄いことなのだろうか。

「空前絶後の強運ですね……。取り敢えず霊夢さんはもうアガリです。あとは静観して下さい」

どうやら一歩先に私は勝ち抜けてしまったようだ。勝ったという達成感も無く勝ってしまった。こうなってくると自分の幸運が恨めしい。

「静観ねえ……。それなら私一旦部屋に戻るわ。」

分かりました、と咲夜の声を聴き流し、食堂を退出した。

その途中、雷鼓と小鈴の興味津津な声が聞こえてきた。多分、トランプに興味を示しているのだろう。

魔理沙はまだ箸を進めていた。

特に何事もなく食堂から個室の集まっている部屋に辿り着いた。私としては、ハブニ

ングやらアクシデントやらが起こつてほしかった。私だつてトランプを楽しみたかった。ババ抜きを私抜きでやるとは、口にしたくないアイロニーを感じる。

当てのない憤りが私のドアノブを握る力を強める。さつさと机を調べてさつさと食堂に戻ろう。今度こそババ抜きにまともに参加しよう。私がドアノブを下げた途端、隣の扉、燐の部屋の扉が開いた。彼女の部屋から彼女自身は勿論、鈴仙まで出てきた。「お、霊夢のお姉さん。……聞いておくれよ。私はもう少し寝ていたかつたんだけどねえ。鈴仙のお姉さんに叩き起こされたんだ。叩き起こされたつて言つても叩かれたのは扉だけだね」燐は私を見るなり欠伸をしながら不服を漏らした。

この2人、変だ。

「そんなこと言つたつて、明らかに私たちおかしいじゃない。浮かれてると思われちゃうよ！」鈴仙は燐の袖をぐいぐい引つ張つて喘いだ。

何故だろう。

「いやあ、どつちかつて言うて浮いてる、じゃないかな。それよりあたいはもう少し寝ていいかい？」対照的に燐は堂々としていた。立派なものだ。

何故この2人は。

「昨日これをあの部屋で見つけてから外れないのよ？ もうちよつと危機感持つてよ！」今度は燐の襟首を持ち、前後に揺さぶり始めた。燐はただただ無力感漂う声を漏ら

していた。

何故この2人の頭から耳が生えているのだろうか？

燐はどこか不吉な黒い色の猫の、鈴仙は清らかな白い色の兎の折れた耳を頭頂でひらつかせていた。何だってこんな時にそんな物を。

「やめておくれよー。伸びちゃうじゃないかー。助けてー霊夢のおねえーさーん」わざとらしく私に助けを乞い始めた。燐の耳も鈴仙の耳も大きく揺れていた。

「あの……当然の質問していい？」私も負けじとわざとらしく、小さく手を挙げた。

鈴仙が燐から手を離し、こちらに真っ赤な目を向けた。その後、軽く右手で兎の耳を引っ張って見せた。

「言わんとしてることは分かるわよ……これのことでしょう？」

「ええ勿論」

「昨日、貴方が凶器室を出ていった後に、3つカチューシャを発見したのよ。何で凶器室にあったのかは知らないけど、私と燐でそれぞれ1つずつ付けてみたの。後はもうお察しの通りよ」

そういうえば、昨日凶器室を出た後に耳がどうか言っていたのが聞こえていた。そういうことだったのか。

「それじゃあカチューシャを外せばいいんじゃないの？」

「外せるモノが無いのよ。ほら」鈴仙は私の目の前に頭頂を晒してみせた。驚くことにカチューシャ部分が綺麗さっぱり消えてしまっているのだ。耳だけが頭に残り、あたたかも生まれつきそこにあつたかのような見かけになっている。思わず言葉を失った。不可思議の連続に私の思考が付いていけない。

「これって……」

「耳を引つ張つてみたんだけど、これが痛くて痛くて。本当に私の耳になつたみたいなの。ここから音も聞けるし、触られた感覚もあるし」鈴仙は昨日のことながらしどろもどろになつている。それはそうだろう。私の身に置き換えて考えても、信じがたい違和感に襲われていただろう。鈴仙は多分そんな状況だ。燐はともかく。

「あたいはまだ猫耳だからいいんだけど、鈴仙のお姉さんは兎の耳だから寝る時なんかは大変だったんじゃないかなあと思うよ。枕の位置とか」

この現象が意味するところとは何だろう？ 八雲紫の過激すぎるジョーク？ 事件を起こすカギ？ それとも、記憶を失くす前の姿？ やはり私たちは元々人間じゃないのだろうか……。

「あれ？ 鈴仙のお姉さんに最後の1つのカチューシャ預かってもらつたよね？ 霊夢のお姉さんにもあげたら？」

「え、ちよつと。私は要らないわよ、そんな得体のしれないモノ」

私の話を聞かず、鈴仙がどこからか怪しげに艶めく白いカチューシャを取り出した。「私たちの話を聴いて逃れられると思つたの？ 貴方も哀れな獣に仕立て上げてやるわ！」鈴仙が両手にカチューシャを持ち、突進してきた。

咄嗟に鈴仙の腕を掴み、何とか間合いを保つ。近づかれたら、私も訳の分からない耳が生えてしまう！

「ちよつと、落ち着きなさいよ！私まで鈴仙みたいになりたくないわよ！」

「私は至つて落ち着いてるわ。今はただ貴方を私と同じ境遇に貶めたいという一点の目的だけ見据えてるわ！」

互いに力が均衡し合い、膠着状態が続く。次第に私が押しはじめた。モノを持つている分だけ、力がそちらに回つてしまっているらしい。

突然、強い力で後ろに腕を持つて行かれた。

「鈴仙のお姉さん！やっちゃえ！」

燐が私を羽交い絞めにしていた。鈴仙との力比で疲弊した私は燐には抗えなかつた。

「何してるのよ！放しなさい！」

「私は鈴仙のお姉さんみたいに恨み辛みがあるわけじゃないんだけど、面白そうだったからね。悪く思わないでくれよ」燐は暢気に笑っている。

「よくやったわ、燐。さあ、観念しなさい……」私の目の前にある笑顔が狂おしく輝いた。首を振ったり、身体を前後に揺すったり悪あがきをするが全く効果は無い。

昨日の天子もこんな気分だったのだろうか。

さようなら、私の普通な頭……。

カチューシャが私の頭に装着された。一体私は何の動物の耳と生活しなくてはいけないのだろう。兎、猫……関連性は感じられない。ということはどの動物でも可能性はあるということだ。なるべく目立たないのがいいなあ……。

いつまで経っても変化が現れない。燐もおかしいと思っただらしく、私から手を放した。自由になった手でカチューシャに触れてみても、ただのカチューシャだと即座に判断できる。

「あれ？ 霊夢のお姉さん？」

「……何ともないわよ。これ本当にそんなシロモノなの？」カチューシャを取り外し、呆気にとられている鈴仙に投げ渡した。一旦、取り損ねたが慌てて掴みなおした。

「嘘でしょ？ そんなはず……あ！もしかして特定の人にしか効果が現れないんじゃないかしら」

私には、鈴仙の仮説が単なる悪あがきにしか聴こえなかった。悪あがきは醜い。さっ

き自分で試してみても分かった。

「一応教えておくけど、食堂に集まってるわよ」

「そうと決まったら行くしかないわね。絶対探してやるんだから」

鈴仙は自信に溢れた顔して個室の部屋を飛び出した。どれだけ他の人を巻き込みたいんだろう。

「燐はどうする？」

「あたいも行くよ。あの人の暴走っぷりは見て面白からねえ」

「眠たいんじゃないの？」

「冴えちゃったよ。鈴仙の姉さんの仮説、正しいのか見物だね」燐は両手を頭の後ろに当て、のんびり歩いて行った。

私も彼女の仮説の行方が気になったので、着いて行くことにした。机の中はまた後で調べよう。

その前に、彼女に大事なことを伝えなくては。

「燐、戸締りしないと」

「忘れてた。猫って記憶力悪いのかねえ」

燐と会話しながら食堂に辿り着いた。彼女は口が達者で、会話していて非常に楽し

い。明朗でとにかくニコニコと常に笑顔を浮かべている。さらに単純明快な思考の持ち主で、裏表のない性格のようだ。一緒にいて深く考えなくても良い溜飲を下げさせる気質とそれら全てがハリボテである可能性の両立する、安心と憂慮を感じさせてくれる人物だ。

「さあ、食堂だよ。誰に耳が付くかねえ」

「まだ食堂に全員集まってないからどうかな。ましてや鈴仙の仮説が合つていとも限らないしね」

「期待しないでおこうか。それに丁度お腹も空いてきたよ。魚が食べたいねえ」

けらけら笑いながら、食堂の扉が開けた。それと同時に、怒号も飛んできた。

「くそっ！私に何しやがったんだ！早く外せ！」頭の突起物に手を当て、戦おのいでいた。

「見つかつて良かったわ。それにしても、耳じゃないとはね」鈴仙は安堵の声を漏らした。それと同時に、ほんの軽く仰天をしていた。

その光景を見ていた燐がニヤリと笑って見せた。

「霊夢のお姉さん、私お豆食べようかと思うよ」

「炒ったものの方が二度美味しいわよ」

私は心の中でざまあみろ、と悪態をついた。朝の敵討ちを果たしてくれた鈴仙に心の底から感謝した。

枯葉動乱

食堂。視線の交点の集団と化したこの場で、誰しもが他人の目から逃れることは不可能である。例え、キノコが格段好きであろうが、手先が異様に器用であろうが、天然ボケが入っているようが、頭から異物が生えていようが、それを覆すことは出来ない。少しでも逃れたくば、目立たないようにするのが得策と言える。人間離れたアクセサリーを装着するなんてもつての外だ。

そんな状況の中、今最も目立ちたくない人物が最も目立つ格好をしていた。ついでに、最も目立つ感情を露わにしていた。

「それで？ 現時点でこれを外す手立ては無い、と」

テーブルを人差し指でせわしなく叩く。聞こえてくるはその軽快なリズムと誰かの嘲り。

「そうだねー。あたいたちも昨日からずっとこのままだし、正邪のお姉さんもそのままだろうねえ……くくっ」

思わず笑いを堪える燐。隣にいる鈴仙も同様だ。むろん、少し離れたところで傍観している私もだ。

「くはっ！あははは！これって傑作だよねえ！いやー、よく似合ってるよ、あたいたちなんかに比にならないね！」

燐が吹き出したのを皮切りに、連鎖的に食堂に笑いの華が咲いた。燐や鈴仙に耳が生えたことへのリアクションは予想ほど濃くなかったが、正邪への笑っていないのはただ一人、言わずもがな正邪だけだ。

「……くそ！こんな、こんな醜態！覚えておけ、鈴仙！」

顔を真っ赤にして飛び出していった。いつもは他人を小馬鹿にしている正邪の悔しがっている姿は、やけに心をすつとさせてくれる。今朝のこともあるし、爽快2倍だ。

すると、唐突に扉の方からバタバタと騒がしい音がした。何かがぶつかつたような音だった。

「うぐう！何だつて言うんだよ！どけ！」

正邪の乱暴な捨て台詞が聞こえた後、逃げ去る足音が遠のいた。

食堂の笑いは収まり、先ほどの音の正体を全員が気になり始めた。私も例に漏れてなかったので、扉の方を振り向いた。

「騒がしいですね……。笑い声が聞こえてきたり、正面衝突されたり。まだ朝ですよね？」

開けっ放しの扉と早苗が目飛び込んできた。「目に飛び込んできた」というのも、早

苗の服装が奇抜だったからだ。食堂に常駐している私たちは全員、昨日と同じく制服を着ている。けれども、彼女は完全にパジャマだ。上下ともに、白地に所狭しと緑色のカエルがあしらわれている。私が両生類嫌いだったら、絶対に着たくないパジャマになっていることだろう。ちなみに、カエルの髪飾りは逆さまになっている。何故ピンポイントにそこだけ。

「朝つてもう8時半じゃないか。もつと早く起きた方が良い」

慧音は説教のような口調だった。どうやら彼女はお節介焼きらしい。まだ暫定的でしかないが。

「健康的すぎますよ、まだ9時にもなつてないです。もうちよつと寝ていたかったですね」

欠伸で大きく開かれた早苗の口は、見ているこちらが眠気に苛まされそうだ。欠伸は伝染する、という聞いたことがある（記憶が無いのに聞いたことがあるとはまた珍妙な話だが）。多分、幻想的迷信だろう。根拠がまるでない。

擦っていた目が突然光った。涙のせいもあるが、他のことが起因しているらしい。何故なら、早苗がテーブルの上に乱雑に放置されているトランプの山を見た途端に、目を輝かせたからだ。

「おおー！こんなどこにあつたんですか!!? 昨日の夜はあんまり暇だったんで手記なん

かつけてたんですよね。でも柄に合わないことはするものじゃないですね、もう飽きました」

寝起きだということによく口が回るものだ。興味津々のまま、妖夢の隣の席に座り、テーブルの上のカードをかき集め始めた。

「あ、私手伝いますよ。さつき奇しくも負けましたので」

妖夢が早苗を手伝い始めた。先ほどのババ抜きで負けたのは妖夢のようだ。ざまあみろ。

「何のゲームで負けたんですか？」

早苗が妖夢に手を差し出し、トランプを渡すよう無言の催促をした。

「ババ抜きです」

その手に優しく丁寧にトランプを置かれた早苗は、もう片方に持っていたトランプと混ぜてシャッフルし始めた。咲夜のように見る者を魅了するような華麗さや器用さは無いが、そもそもシャッフルとはそういうものではない。最初に卓越した技術を見たせいで感覚が麻痺してしまっていた。

「ババ抜きですかあ。確かに『奇しくも』ですね。じゃあ、ダウトでもやります？ 運だけで決まる勝負とはわけが違いますよ、知ってますか？」

早苗はトランプに対する造詣がそれなりに深いらしい。咲夜も同様だった。これも

欠如以前の記憶によって生じる不均衡で不公平な情報の1つなのだろうか。

「是非、教えてください！今度は負けたくないのです、出来ればコツなんかも教えてくださいー！」

妖夢は上ずった声で早苗に乞っていた。

「いいですか、このダウトというゲームはですね。如何に、瞬発的に計算できるかがカギを握ってまして……」

早苗の話を「聞いて」いた。「聴いて」はない。簡単に言うと、馬耳東風だった。頭から眠気の濃霧が消えていて、同時に、さっきの意気込みはどこへやら、トランプへの意欲は殆ど消えていた。睡魔が見せた幻想だったのかもしれない。

「よし、じゃあ私に付き合え、霊夢」

魔理沙が唐突に私の肩に手を置いた。何が「よし」で、何が「じゃあ」なのだろう。

「全然意味が分からない」

私が横に控えめに腕を広げて肩を竦めて見せた。謂れ無きオーバーな態度の誇張である。

「お前、暇だろ。私にはこんな状況だからこそ、取るべき時間潰しの案がある。着いて来な」

私の意思を全く無視して、食堂から出ていってしまった。参ったなあ、あれじゃ着い

て行くしかない。ただ、私一人従順に着いて行くと、哀れな敗北感に囚われることはまず間違いない。だったら、道連れを一人選出しておこう。

「よし、じゃあ雷鼓行きましょう」

一番近くにいた雷鼓の腕を掴み、出口まで無理やり引いた。何が「よし」で、何が「じゃあ」だったのか、今なら分からなくもない。

雷鼓は私と魔理沙のやり取りを聞いていたようだった。だからこそ、乗り気じゃなかった。

「えー、トランプやりたかったのにいー」

「それは魔理沙に言つてよ」

隣で私たちを見ていた小鈴と星は苦笑いしか出来なかった。

私と雷鼓が魔理沙に連れられたのは、またもや個室の集まる部屋だった。既に2往復目である。これ以上、ここですることでもあるだろうか。

私たちが呆れ返つてる中、魔理沙はドアノブの彫つてある文字を見て、何かを吟味しているようだ。

「布都、小鈴……ちよつと違うな。メディスンも違う。天子も、かな？　咲夜と妖夢は食堂にいたな……。お、こりゃ良いカモだな」

宝を発見したかのように不敵な笑みを浮かべた。その様子を、部屋の出入り口付近で関心なく見ていた私と雷鼓は顔を見合わせた。

「結局、何がしたいのよ？」と雷鼓。

「知識欲のままに動いてるだけだ。今回のテーマはこちら……だぜ」

魔理沙は突然、何かの役を演じた。彼女の空想は度外視できない、良い意味で。

「ここが誰の部屋か憶えてるか？ 忘れてるだろうから教えてやる。ここはさとりの部屋だぜ。あの『いつでも私は寝られます』みたいな眼をひん剥かせてやりたいと思う」あまりに突拍子が無く、滑稽な野望に虚を突かれた。勿論、悪い意味で。その後も、恐らく段取りであろうことが延々と続いた。雷鼓を一瞥してみると、歯痒さに満ちた顔をしていた。

苦心して彼女の話をつなぐと「まずノックをして、さとりが出てきたところを大声で驚かす」らしい。あんなに長々話しておきながら、この程度で要約できてしまうのは、言うまでもなく私の才能故ではない。

「善は急げだ。ま、見てな」

魔理沙は目の前の木製の扉を2回ノックした。ノック音には潜在的な心地良さがある。私たちヒトの心を直接響かせる不思議な力がある。もつとも、取るに足らない理由で連れてこられた、ぶつけようのない鬱憤とでイーブンというところだ。さとりの目覚

めを全く見たくない、というわけではないがわざわざこんな形で見たい、とは思わない。だから、さつきと終わらせてほしい。というのが私の本音だ。

ノックの後、僅かな静謐に包まれた。さとりは部屋から出てくる気配もなく、ただ時間だけが過ぎていった。

「おはようございまーす！もう朝だぜー！」今度は乱暴に3回。

それと同時に、雷鼓が小さく声を上げた。どうやら、開かれた扉が背中当たつたらしい。扉を開けたのはさとりで、昨日と同じ制服姿だが、髪が湿っていた。手にタオルを持っている。浴場に行っていたのだろうか。

だが、魔理沙はそれに気づかず、未だに扉と会話している。私はさとりに何とか視線で沈黙を促し、魔理沙を指差した。

これだけでさとりは一通り察してくれた。相も変わらず眠たそうな顔で、後ろからこっそり魔理沙に近づいた。

「全く。これだけ起こしてやってるのに、失礼なヤツだぜ」
「ええ、本当に失礼ですね」

さとりは魔理沙の背後で今にも消えてしまいそうな声を発した。

「お前もそう思うだろ？　ってあれ？」

それに反応して、魔理沙は後ろを振り向く。

「うわあ!! さとりが何でここに!」

予想外の出来事に、思わず尻餅を付いてしまった。

「おはようございます。良い朝ですね」

そんな魔理沙をよそに、さとりは冷静に濡れている髪を拭つてた。

私は慌てふためく魔理沙と平静なさとの対比的な光景が可笑しくて、雷鼓と2人でお腹を抱えて笑った。

「な、何だつて朝から浴場に行ったんだよ」

「1日のメリハリを出すために敢えて行きました。貴方こそ私に何か用ですか?」

魔理沙が立ち直り、さとの顔をまじまじと見つめる。

「お前、寝起きか?」

「そうですね。ちょうど30分前程に起床しました。それが何か?」

「ずっとそんな眠たそうな目してるんだなあ」と魔理沙が関心深く唸り、腕を組んだ。

「私自身は快調なんですよ。生来みたいですね、どうやら」

さとの髪は乾きつつあるようで、これまた生来なのか、濡れていて真っ直ぐに降りていた髪型が寝癖のような髪型に戻っていた。

一通り笑った雷鼓が大きく息を吐き出した。

「ふう。さとりは食堂に来ないの?」

「私は結構です。昨日、机の中から本を発見しましたので、そちらを優先したいと思います」

咲夜の部屋にはトランプがあり、さとりの部屋には本があった。私の幣のような、欠けた記憶を蘇生させるキーではなく、普通に普通な暇つぶしグッズだ。

そもそも、本当に本なんて持つてるのだろうか？朝から浴場に、というのもよくよく考えると不自然だ。何か隠しておきたいことでもあるのだろうか？

「それでは失礼します。3人で行動しているから大丈夫でしょうが、念の為」

さとりはこちらに背を向けたまま、静かに呟いた。

「くれぐれも死なないでください」

扉を開け、部屋の中へ入った。彼女の言葉は私たちに重く深く沈んでいった。

私たちは再び思い出した。このゲームに安息などない、ということ。誰かに隙を見せると、すぐにそこを突かれる。冷徹で残忍な思考と、情報と印象の正確な取捨選択能力、臆病な決断力を持つていなければ、八雲紫には決して勝てない。その点において、少なくともさとりは私より優っている。まさに今、強く感じさせられた。

「それじゃあ私たちも行きましょうか」

雷鼓は鈍重な空気を軽薄に吹き飛ばした。考えもなく喋っているように聴こえた。

「待つて雷鼓。食堂に戻る前に寄りた場所が」

個室集合室から出て行つてしまひそうになつた雷鼓を何とか引き留めようとする。

「誰が食堂に戻るつて言つた？ 浴場に行くわよ。着替えは要らないけどね」

私が言い切る前に、雷鼓が私の卜書きまで読んでしまった。彼女も私と同じことを考へていたらしい。

「おい、まさかさとりを疑つてるのか？ まだ何も起きてないじゃないか」私たちの言動に疑念を抱き、一步も動かないまま魔理沙の顔が曇つた。

「何か起きてから、じゃ遅いのよ。何か起きる前から情報を収集しておくべきなの」

雷鼓がピシヤリと言ひ放つ。まさしくその通りなのだ。情報量こそが明暗を分かつ。「それは分かつてるんだけどな。良心の呵責つてヤツかな、やつぱり人間の性だよ。過去の過ちを贖い、現在を憂いて、未来を形成させる。人間という『現象』の本質だ。私たちは今、贖える過去なんてないけどな。……だからこそ、その尊厳を害する八雲紫は倒さなくちやならん。分かつてる、分かつてるんだけどな……」

意味深な言葉を吐いてから彼女は個室集合室（さつき私が命名した）を退出した。彼女の言う「害された尊厳」とは過去の過ち、の部分だろう。現在を憂いて、とはどういうことだろう。現在とは常に後悔の連なりで形成されている、ということだろうか。後で訊いてみようかな。

魔理沙からは、いつもどこもない人情味を感じる。彼女は18人の中で最も人間らし

く人間らしい。ヒトらしからぬ冷然と彼女のような人情のバランスを保つのが、ライフラインになるかもしれない。どちらか片方の比重が大きいと健全に生きられない。「生きる」ことより「人間である」ことが私にとっては重要だからだ。

そびえ立っている木の札を抱えるロッカー群はどこかにノスタルジーを残し、さりげなく湿っているフローリングからは靴下を濡らすという洗礼を浴びる。私たちを映す鏡には湯気の形跡は一切無く、その前に整然と居座っているドライヤーにも使われた形跡が無い。

脱衣所に誰かがいたような雰囲気を感じられない。強引に私たちと結びつけるとするなら、この脱衣所もまた「さとりがいた」という記憶を奪われたのかもしれない。だがさとりがここにいなかったならば、話は別である。そもそもそんな記憶が存在しないことになるからだ。

「へえー。意外とアットホームな作りだな。これじゃどつちかつて言うのと、浴場じゃなくて銭湯だな。愛着湧きそうだけ」

18つのロッカーを一室一室覗き込みながら喋っているせいで、魔理沙の声が変にエコーが掛かっている。

「……妙ね」と雷鼓が私に聞こえるか聞こえないからくりの声で呟いた。多分、魔理沙

には聞こえていない。

私が訊き返す間もなく、雷鼓は話し始めた。

「床が濡れてるのに、鏡やドライヤーは綺麗なまま。衛生面から考えて、1日1回ペースで掃除はされているはず。さとりが工作したとしたら、床なんて一番目立つところ見逃すとは考えにくい。さとりと私たちの間に、誰かここに入ってきたのかしら？ でも来る時には誰ともすれ違わなかったし……」

言われてみると確かに不自然だ。「浴場の脱衣所だから濡れていて当然」というステレオタイプがもたらした見落としだ。『目立つ』はずなのに『盲点』、ここを見逃してしまつたのは手痛い。

「警戒して。まだ誰か隠れてるかもしれないわよ」

雷鼓が強い口調で私と魔理沙に注意を促す。私はすぐに浴場の方を向き直す。隠れる場所と言えば浴場しかない。が、脱衣所の側からは浴場を見通せない。モザイクガラスのようでも向こう側が霧もやがかつたように見える。

魔理沙は力の抜けた声を漏らしながらロッカーから顔を出した。今までの会話を全然聴いていなかったせいで、辺りを不思議そうな顔で見回している。

ひりつくくらい凝視。貼り付く注視。一向に何も起こらない。音もしない。

痺れを切らしたのかそれとも緊張の糸が切れそうなのか、雷鼓が動き出した。浴場へ

通ずる扉まで力強く歩き、木製の引き手を掴んだ。雷鼓の緊張がこちらまで伝わってくる。よく分かつていない魔理沙も顔を引きつっているように見える。

瞬間、ガラスの向こうにシルエツトが現れた。濁った琥珀色のシルエツトが蠢いている。私たちに気付いたのか、すぐにその琥珀は扉のガラスから姿を消した。つまり、あれは人だ。私たちを視覚して逃げたのだから間違いない。

「おい、誰だ!!」と魔理沙が叫んだ時には既に跡形もなく消えていた。

脱衣所の空気は一変して張りつめたものになった。知らず知らずのうちに私の拳には力が入っていて、生唾を飲んでいた。鬼が出るか蛇が出るか、それとも……。

それからすぐに、「開けるわよ」と意を決して雷鼓はゆつくりと扉を右に引く。扉の音が脱衣場にも浴場にも響き渡る。波乱の幕開けを知らせるファンファーレのようにも聞こえた。

私たちはそこで思いもよらないものを見た。私たち3人が3人とも震撼せざるを得なかつた。

人妖方程式

浴場に立ち込める熱気と湿気が次々に、私の顔を、身体を鬱陶しく掠める。変に温いせいで、不快感しか覚えられない。その湯気のせいで全容は見えないが、水色のタイル床や壁の中に大きな湯船を確認できた。だが、今そんなことは些細より些細だ。

問題は、水色にはそぐわない艶やかさが潜り込んでいることである。

その艶やかさは、人間だとは考えられないほど鋭利でしなやかに長く伸びる紅の爪を携え、頭にはピアスを携えた猫の耳が付随している。背後には黒い尻尾が2本。明らかに人間ではない。

「おい、そいつ変だぞ!! 近寄るな!!」

魔理沙が叫んだ直後、橙色がタイルを蹴った。一番近くにいた私のところまでたった1回の回転しながらの跳躍で到達し、体当たりで私を吹き飛ばした。近くと言っても私と猫は5メートル以上も距離があった。

獯猛すぎる一撃をお見舞いされた私は空中で浴場と脱衣所の境界線を越え、ロッカーの側面に背中を強打した。脱衣所中をつんざくように響く衝撃音。猫からの打撃とロッカーでの衝撃が強かったせいで、息が数秒出来なくなり足を前に投げ出してへたり

込んだ。

すぐに猫がロツカーに、私に覆い被さるように手をついた。逃げ場を失った私は、ただ猫の顔を睨みながら必死に咳き込みに身を任せることしかできなかった。

猫の目が野性的にギラリと輝いた一瞬、鮮やかすぎる紅色の爪が空気を切る音が聞こえた。

嗚呼、正体不明の猫又に負かされてしまうなんて。自分でも信じられないくらいあつさり諦めが私を支配し、死を悟り猫の顔から視線を外してゆつくりと外界からの光を遮断した。

また、空気を切る音が聞こえた。私が貫かれた音だろうか？意外と死ぬ前の意識というのは肉体にこびりつくものなのかもしれない。

1秒も経たずに聞こえたのは高速で柔らかい物に硬い物がぶつかるような鈍い音、そしてヒトのように獣のような苦悶の呻き声。その後、床に布が擦れる音が数秒。

何があつたかこの目で見たいという知識欲と私は今どうなっているのだろうかという存在の所在の確認とが私の臉を持ち上げた。

私はまだ脱衣所に座り込んでいた。どこにも傷は無い。背中の痛みは未だに私の背中を疾走しているが。傷どころか、目の前の猫又さえいない。

「おい、霊夢！ 無事か!? 怪我は!?」

私の目の前にいたのはすっかり血相を変えた魔理沙だった。思い切り足を振り上げていた。息も絶え絶えで余程泡を食っていたのか、彼女お気に入り魔女帽子をその頭に乘せていない。

「え、ええ。私は、大丈夫……。助けてくれてありがとう」

「私の蹴りが……光ったんだぜ。もうちよつと褒めてくれ……」

今にも倒れてしまいそうなほど疲弊しているように見えた。蹴りとは私の想像以上に体力を奪うらしい。

「安心してる暇はないぜ。……ほら、見てみる」

魔理沙の視線は私を軸として対称の点に集まった。私もそこへ目を向ける。

仰向けで大の字になっていた黒猫が機敏に跳ね起きて、まるで本物の猫であるかのように四肢を床に降ろしこちらを威嚇する。2本の黒い尾は天を貫くように逆立っている。

「何なんだよコイツ！ これも何かしらの凶器なのか!? 冗談じゃないぜ、誰があんな猫人形を使役できるんだよ！」

不満と恐怖とを一息にまくしたててみせた。息こそ整っていないものの、肩の上下運動は既に収まっていた。

「私に訊かないでよ！ まだ背中痛いんだから！ とにかくこの場をどうにかしないと、私たち2人ともお陀仏よ」

私も思いの丈をぶちまける。背中の痛みは引くことを知らないようだ。

叫ぶようにして魔理沙に応答した直後、黒猫の左足に僅かに力が入るのを見た。

跳んでくる。私が声を上げる前に、黒猫の姿はもう消えていた。

が、それと同時に私と魔理沙の目の前に千万無量の金色が広がった。

「やれやれ。水のあるところには近付くな、とは再三言つてたのだがなあ。これじゃまだまだだな」

八雲紫の小間使いの九尾の狐が忽如として現れた。一切の先触れはなかった。黒猫はというと、こちら側から顔が出ている形で脇に抱えられていた。手足をこれでもかという程に乱暴に振り回していたが（私たちからは足が見えないが、手と同様だとは想像に難くない）、一向に脱出できる目途は立ちそうもない。

「お前……八雲藍、だったか？ 答えろ、この獣は何だ？ お前等の手下か!？」

「後で答える。少し黙ってる」

八雲藍が理解不能な呪詛を唱え始めた。私たち正真正銘の人間には一切合切影響を及ぼさないが、黒猫にとつてはそうではなかった。顔から必死さがどうしようもなく見て取れたのに、顔からは力が抜け始めじわじわと何者かに身体を縛り付けられるかのようになり動きが制限されていった。しまいには、ピクリとも動かなくなつた。死んでしまつたのか？

「それで？ 『橙』^{チエリ}のことを訊きたいのか？」

静かに、静かな猫をロツカーに寄りかからせるように座らせた。こちらに尻尾を向けたまま話すのでなんだか釈然としない。

「ちえん？ その猫の名前？ 随分と変な名前ね」

「名付け親のセンスが知れるぜ」

私と魔理沙が井戸端会議かのように笑っていると八雲藍は鋭利な視線をこちらに突き付けた。

「それだけか？ 私も暇じゃないんでな。さっさとここから出ていけ」

「いやいや、ちよつと待ってよ。ちゃんと教えてくれないと困るのはこっち。私たち橙に殺されかけてるのよ？」

「全くだぜ。私の屈強でしなやかな足技が無かつたら、橙とやらが『処刑』されてたなあ？ お前らの言ってるゲンソウサイパンでな」

八雲藍は漸くこちらに向き直す。眼には妖怪的でありながら機械的な雰囲気を感じ取ることが出来た。ただの人外じゃないのか、この狐。

「その件に関してはこちらの不祥事だ、申し訳ない。改めて紹介させてもらおう。彼女は橙。紫様の部下の部下、つまり私の部下だ」

「回りくどいぜ」

「橙は水に弱くてな。水に触れてしまうとさつきのように野生に戻ったかのような獰猛さを取り戻してしまう。だから、脱衣所の掃除でもさせようと私が指示した。ただ、何を間違ったのか浴場の方に足を向けてしまったらしい。後はお前たちの方がよく知っているだろう」

「何だ？ 何かが意図的に情報制御してるのだろうか？ 橙の正体について、彼女は一切言及しない。こんなにも橙や八雲藍が人間でないのはあからさまなのに、何故わざわざ隠匿する？ 知られるとマズいことでもあるのだろうか。」

「はつきりしないなあ。単刀直入に訊くが、お前らは『誰』、じゃなくて『何』だ？ 人間じゃないってのは記憶を失くしてる私たちでさえすぐ分かるんだよ」

八雲藍に向けて思い切り指を突き出した。そこそこに細かった八雲藍の眼差しはさらにシャープさを増した後、再び金色をこちらに向けた。

「その質問には答えかねる。紫様から耳が痛くなるほど忠告されているからな」

「ふざけるのも大概にしろよ。だったら、何で『お前らが人間以外ではないとは判断できないまでの記憶』まで奪わないんだ！」

魔理沙の語調は強かった。この質問にはゲームの核心を突く秘密を暴く力がある。

『人間ではない』ことは良い。だが、その奥に潜む露を払ってしまうことはこのゲームの律を破壊するのと同意義。これが私が答えられる最大限度だ」

意味深な言葉を吐き残して、八雲藍はいつからか現れていた床の裂け目に消えていった。直後に裂け目も閉じた。もうどこにも裂け目があった形跡は見つからない。

「はあ……。結局何にも分からず仕舞いか。むしろ、余計な混乱まで招いただけか」

本当に何も分からなかっただろうか？ 私にはぼんやりとだがヒントが見えた気がする。八雲藍の言っていたことには「私たち運営側からは、私たちが何者か言えない」と纏められる。逆に言うなら「お前たち自身が私たちの正体を説明する分には何も問題はない」ともとれる。大丈夫。屁理屈だつて理屈だ。私が言いたいのはそんなことじゃない。「私たちが説明する分に問題ない。運営側から正体を明かすと私たちには利益を、運営側には不利益を被る」ということじゃないだろうか？ 私が予想するに、それが何かのキーになるのではないだろうか。例えば、私たちの記憶を甦らせる、とか。

一通り、途方に暮れた私はとあることに気が付いた。

「そっういえば雷鼓は？」

「実は橙に吹き飛ばされたのはお前だけじゃなかったんだ。お前がロツカーに体当たりしたあの直線運動の時、霊夢の近くにいた雷鼓も巻き添え食らったんだよ。幸い、軽く床に頭を打っただけで済んだがな。気も失ってないし、脳震盪も起こしてないみたいだ。大事を取って浴場で休ませてある。風呂に浸かつてるわけじゃないぜ」

それを聞いた私は雷鼓の安否がやけに気にかかり、今立っている地点から浴場まではたいした距離ではないにもかかわらず知らない間に走り出していた。

「あ、霊夢。その様子だと無事みたいね。あの猫、よくもまあ2人も蹴散らしてくれたわ。蹴ったかどうかは別としてね」

コの字型の黄緑色の風呂椅子に整然と座っている雷鼓。何も無かったかのように飄々としている。いつの間にか上履きと靴下も濡れないように脱いで手に持っている。抜け目ない。

「ええ、私は何とか。雷鼓は大丈夫なの？ 頭打ったって魔理沙が言ってたけど」

「猫が霊夢を脱衣所まで追って行った時に、猫を止めようと向かって行ったらあつさりと吹き飛ばされちゃって。頭を打ったには打ったんだけど、単に倒れたただけだからちよつと痛かっただけ。その代わり、セーラー服はびちゃびちゃになっちゃったの」

身体を曲げて背面をこちらに見せた。濡れた服が背中に貼りつき、うっすらと肌色と

下着が透けて見えるのが雷鼓の話していたことの裏付けとなった。

「てことだから、先に食堂に行つてもらえらる？ 是非とも着替えたいから」

「私が食堂に行こう、なんてよく分かつたわね」

「そんなのちよつと考えれば分かるでしょう。取り敢えず浴場での出来事を具に報告しておいて。私の記憶と違う点があつたら、霊夢がウラギリモノだつて決めてかかるから」

語調を強めて私を戒めた。底の知れない佇まいなのにどこか芯を感じる。雷鼓の強みはここだろう。何故かこちらの手を見透かされているような、そんな気分させられる。彼女がウラギリモノだと厄介この上ない。

「怖いこと言うわね。そんなに信用ないかしら？」

「相手が誰だろうと言つてるわよ。それじゃあまた後で」

足元に落ちていた魔女の帽子を拾い上げ、すつくと立ち上がり私の前を横切つた。靴下と上履きは脱いだまみまで。そのまま脱衣所を出ていったのを見るに、個室までそのスタイルを貫くらしい。

忘れ物、と大げさに呟いて魔理沙の頭の上に帽子を乗せた。不安定だつたようで、帽子を被り直す。少なからず湿っていたようで、ちよつとだけ不満げな顔をしていた。

「さて、私たちもさつさとここから出るぜ。橙が起きる前にな。また牙を剥けてくるかもしれないからな。いや、向けたのは爪だったかな？」

「どつちでもいいわよ。雷鼓にウラギリモノだと思われなように迅速に報告しなきや。橙を起こさないようにね」

未だに眠っている橙を横目に、音を立てないように脱衣所を離れた。黒猫が目の前で通り過ぎると不幸が訪れるという迷信があるのを私は知っている。が、黒猫の目の前を通り過ぎるとどうなるかまでは知らない。逆に幸運が訪れたりするのだろうか？

脱衣所から出ると、天子が歩いてきた。顔には今起きましたと書いてある。反面、制服の襟に波は立ってなく、裾に折れ目一つ見当たらない。帽子の桃の飾りは昨日と違って、後頭部側に居座っているが。

「よう、天子。おーい起きてるか？」

天子からの応答がない。そのまま廊下をずりずりと足を進めている。

「てんしー。本当にアンタ起きてる？」

私が天子の目の前に飛び出して、顔を近づけてみる。天子の眼は開いたり閉じたりを

不定期に繰り返して、真紅の瞳がこちらを向いたり向かなかったりしている。

直後、漸く私たちの存在を認めた彼女は、ひゃん、と少女らしく口走った。軽く飛び上がった後、さして大きく開かない眼で私を穴を開くほど見つめる。

「何で浴場から出てきたのよ」

「お前が今日起きたのと同じ理由だぜ」

魔理沙はまだ帽子のつばの湿りを気にして、指先で弄っている。

「訳分かんない。ふああ……。やっぱりもう一回寝たいんだけど、部屋戻っていい？」

「それは今から私たちが食堂に行くのと同じ理由だぜ」

魔理沙は時々意味の分からないことを口にする。言葉遊びのつもりなのだろうが、考え方を派生させてもさせても源流が見つからない。多分、そんなものもない。彼女は煩雑に言葉を並べてるだけだろう。

「食堂……。ね。私も行こうかな」

「え？　じゃあ元々何処か行こうとしてる場所でもあったの？」

「凶器室。目を覚ますならあそこかな、ってね」

とんでもないことを言い漏らした。自分が何を言っているのか分かっているのだろうか？　私には分からない。

「随分奇抜な習慣をお持ちで。八雲紫に何か吹き込まれでもしたか？」

「冗談はよしてよ。その名前聞くだけでイライラしてくるんだから」

天子が魔理沙から帽子を取り上げ、彼女の手の届かない位置まで帽子を掲げた。魔理沙は目いっぱい腕を伸ばすが、身長差のせいでもそれも徒労となった。

「何だよ、酷いぜ。霊夢、取り返してくれ。お前なら届くだろ」

「さつさと食堂に行きましょう。帽子なんていつでも取り返せるでしょ」

私はわざと魔理沙の願いを無下にした。ややこしい言葉遊びへの細やかな対抗心だ。

「やれやれ。身長と人情味って反比例するんだな。たつた今判明したぜ」

サラシモノ

食堂の席に腰掛けた頃には、天子の眠気は飛び去っていた。不規則に開閉を繰り返していた瞼はガツチリと目の上部に固定された。時折、目を潤すために降りてくるのはわざわざ言う必要が無いだろう。

「いや、そんなの訳ないぜ。キノコの手にかかれば、な」

「さつきからアンタそればかりじゃない。今日の朝も食べてたし」

「一日の計は朝にあり、だぜ」

「それはちよつと意味が違う」

天子の手にはもう魔女帽子が無かった。代わりに、私の頭の上に居座っている。しかし、私はリボンを着着しているが故に、帽子は私の頭には収まらずに後ろ側が少し浮き上がっている。私の頭くらいの高さならば、魔理沙が腕を伸ばせば十二分に届くはずなのだが、一向に取り上げる様子が見受けられない。私としては違和感を感じるのでさつさと取って欲しい。

さて、私へのウラギリモノ疑惑を払拭しなくては。

「ちよつといいかしら？ 私から話しておきたいことがあるの」

立ち上がって皆の注意を引いた。ゲンソウサイバンのデモンストレーションも兼ねて、大勢の前で話すということを練習するべきだろう。

食堂にいる全員の視線が私に集まったのを確認したのち、浴場での顛末とさとり の件について話し始めた。

「私の報告はおしまい。質問があつたら言つてね」

数秒の沈黙の後、早苗が口を開いた。

「大丈夫なんですか？ 怪我とか無いんですか？ 話だけ聴くと、霊夢さんが気絶してたり再起不能になってたりしてもおかしくないんですけど」

「幸運なことに、背中に痛みが残っているだけで後は殆ど何ともないわ」

真正面からの高速衝突と背中 of 強打で後遺症が全く無いと考えると私は本当にラッキーだ。思えば、ババ抜き の時から私のラッキーが始まっていた。私の武器の一つになるだろうか？ このラッキーはいつまで私に付いて来てくれるのだろうか。

「ツイてますねえ。もしかして霊夢さんがウラギリモノ、だったりして」

「ちよつと。冗談はよしてよ」

「ほんのジョークです。とは言つても、こういう風に疑つてかからないといけないですよ、ルールのシステム上は」

すると突然、魔理沙が横から口を挟んできた。

「じゃあさ、この場で一旦話し合ってみないか？」

「何についてよ」

大方予想は付いていたが、敢えて訊ねた。何故だか訊ねなくてはならないような使命感に駆られた。

「誰がウラギリモノなのか。怪しいヤツを根拠もなしに突っついていくゲンソウサイバ
ン第零審を」

魔理沙の突拍子もない言葉が食堂中に染み渡った後、立っていた人は椅子に座り、談笑していた人はテーブルの中心を向き直す。

ゲンソウサイバン第零審——それが意味するところはたった一つ。

ようやくゲームが回り出す。私たちの意思や感情なんて残忍に斬り捨てて。

「さつきも言ったけどさとりと雷鼓はこの場に来ないわ。まだ起きてないのかそれとも起きてるけど来てないのか分からないけど、他にもいない人がいる。それでもやるの？」

「当たり前だぜ。私たちがウラギリモノに勝つには早々に手を打つ必要がある。誰かがいなくてもまずは始めることが重要だ」

この話し合いにはメリットとデメリットが存在する。メリットとは言わずもがな成功すればウラギリモノを発見できること。反してデメリットとはこの話し合いの性質、すなわち薄っぺらな根拠で闇雲にお互いを疑い合う点である。もしこの話し合いでウラギリモノが見つからなかった場合、険悪なムードが蔓延するのは明らかだ。

「それで誰がいらないんだ？ さとりと雷鼓と……」

「布都にメディスンとチルノ、あとさつき出ていった正邪がいらないな」

慧音が、魔理沙の誰に投げかけたとも分からない質問に即答した。

「よく覚えてるな。圧巻の記憶力だな。まだ1日しか経ってないぜ」

「基本だ。まさかそれだけの材料で私を疑うつもりか？」

「そのまさかじゃないぜ。だけど、次は無いと思つていた方が良く」

一瞬だけ魔理沙の顔に邪悪が見えたような気がした。他人を疑うとはこういうことなのだろうか？ 本当にこの話し合いは私たちにメリットをもたらしてくれるのだろうか？

次に口を開いたのは水蜜だった。

「しかし、約3分の1もの人数がいらないのに話し合ってしまったて大丈夫ですかね？ 仮にこの場にウラギリモノがいたとしたら、私たちの意志が偏向されてしまうのではないのでしょうか」

「さっきも言っただろ？ 始めることに意味があるんだ。膨大なリスクを背負ったとしても微かな希望があるとしたら私はそれに縋りたい」

「確かに、魔理沙さんの言う通りですね。少々臆病になっていたようですよ」

その横から、偉そうに腕を組んでいた天子が口を挟んできた。

「ちやつちやつと始めましょうよ。包み隠さず誰を疑ってるかの吐露をね」

発言の後、時計の針の音だけが緩やかに食堂を走り回った。誰も内なる疑惑を吐き出すそうとしない。

「何よ、だんまり決め込んじゃって。埒明かないわね。じゃあもう私から言うわよ。私が今疑ってるのは……」

天子の発表の直前、食堂の扉が開いた。

「おっはよー……あれ？ 何で皆座ってるの？」

「あたいたちに秘密で何しようとしてるのさ！ 混ぜろ！」

「我はまだ眠たいと言っているだろう……寝床へ帰してくれ……」

メデイスンとチルノと布都が扉の前に立っていた。前者2人は既に眼球がしっかりと視認出来るが、布都の方はというと殆ど見えなかった。多分布都も見えてない。察するに、無理に起こされたらしい。足元も覚束ない。

「お前たち、遅すぎるんじゃないのか？ もつとテキパキと行動するべきだろう？ 他人も迷惑が被つてることを考えて行動しなくちゃならないんじゃないか？」

呆れるほどにつまらない説教。膨れ上がる退屈。まるで眠りに誘うかのような内容。言うならば、よくあるお堅いお小言だ。慧音の頭の固さを痛感した。彼女の前で余計な言動や行動は慎んでおこう。面倒だ。

「誰もあたいたちに早く来いなんて言つてないじゃない。煩いわね」

あたかも先生に反抗する小生意気な子供のように、周囲の注意を疎ましく思う育ちの悪い少女のように口答えしたのはチルノだった。今回に至つては、間違つたことは言つてない。慧音が勝手に早く集合することを「正義」として、「一般常識」として、「普通」として振りかざしているだけに過ぎない。隔離された私たちに「普通」なんて存在しないし必要ともししていない。唯一の「普通」は我々が人間であることだけだ。一般的普遍的な「普通」は既に八雲紫によつて剥奪されている。

「何だと!? もう一回言つてみる！」

熱くなつて立ち上がるうとした慧音を隣に座つていた水蜜が何とか抑え込んだ。双方が被つている、というより乗せている帽子が滑り落ちそうになっていた。お互いが帽子を調節しようとしたところで慧音は平静を取り戻し、水蜜もまた椅子に座り直した。

「取り敢えず空いてる椅子に座りな。ウラギリモノ探しの第一歩だぜ」

魔理沙が不敵な微笑を浮かべた後、メデイスンは、真意とまでは行かないものの魔理沙の言っていることをそれとなく感受したようで、立ったままの姿勢で眠ってしまった。布都を無理やり引つ張って空いてる席に座った。チルノは何だかよく分からないけど座っておこうの姿勢で受動的に座った。

「で？ あたいたちに一体何させるの？」

「だいたい分かるでしょ？ 魔理沙の言うこと聞いてなかったの？」

「しつかり馬耳東風！」

堂々と自らの汚点をさらけ出し、むしろそれを誇るべきことのように凜としているチルノを見て一同は大なり小なり歎息した。

「とにかく、アンタたちが入ってきたせいで私の話が一時中断しちやっただけ。だから、何も考えず私の話を聴きなさい。考えるのはそれからいいから」

天子の自信過剰ともとれる発言を聴いたチルノは一言、「わかった」と真顔で頷いた。「私がウラギリモノだと疑ってる人物、だったわね。心して聴くことね。それは……」

否応なしに緊張が私の身体の表面を走り回る。もし私だったらどうしようか。どう返答すればいい？ 天子に殺されてしまうのだろうか？ 一種のパニックに陥りそうになる私を何とか自我が抑え込んでくれる。

「霊夢とメデイスン。理由は簡単。冷蔵庫の件より前に私は八雲紫に襲撃された。その

時私と行動してたのがさっきの2人だったってわけ」

幸先が悪すぎる。私の運は一切合切尽きてしまったのだろうか。いきなり私に疑いの眼が向けられるとは……。いや、よくよく考えるところの理由にすら反論できないだろうか？あまりに軽薄すぎる。待て待て。そうだった。お互いの関係がまだ完全にコネクトがない状況、むしろ確実に確立した根拠を提示する方が困難だ。裏を返せば、殆どの場合「何となく」で片づけられるのだ。だからこそ、真に受ける必要はない。聞き流す程度が一番ナチュラルなはずだ。

「以上、反論はある？」

天子の言葉は僅かに不遜さを内包させていた。

「特に材料も無いからしませーん。それより、お腹空いたから冷蔵庫に取りに行つていいよね？」

メイソンは誰の了解を得る間もなくキッチンの方へ足早に向かった。チルノも何も言わずにメイソンの後を追った。彼女たち2人は私たち18人の中で抜きん出た見た目に幼い。背丈なんかは私より遥かに小さい。頭一つか二つ程も小さい。

逆に一番慎重が高いと言えば、星だろうか。次いで咲夜あたり。いや、同じくらいかもしれない。脳内で星や咲夜とチルノやメイソンを並べて立たせてみるとその差は歴然だ。いつそ親子と言つても差し支えないほどの身長差かもしれない。

天子から意見を求めるような眼差しを向けられたので「メディスンに同じ」と何食わぬ顔で返答した。天子もあまり興味無さそうに私から視線を外した。私を疑っておきながら。

「ごめんなさい、私も霊夢さんをちよつぱりだけですすが疑ってます」

「はい、私も。霊夢の周りだけやたらに不思議なことが起きてるからねえ。私の耳とか」
恐るべきことに便乗者が現れた。早苗と鈴仙の2人だ。私はこれ以上の同意がないことを心の奥の奥で祈り願った。この先、私は大丈夫なのだろうか？いくら理由が薄い、明白でないとは言つても3人から疑惑を、まして目の前で投げ付けられるのは心にくる。

「えー、3人もいるの？ 反論の材料が一切ないし割と辛い状況ね……。他に私を疑っている人はいるかしら？」

わざとらしく全員に質問を投げ付け返した。他の誰からもリアクションを得られなかったので私はほんの少しだけほつとした。

「それだけ疑われているなら霊夢、お前の疑ってる奴を聞かせてくれよ。ちよつとしたストレス解消といこうぜ」

私が疑っている人物……誰だろう？ 今一度振り返ってみようか。

確か一番最初、即ち昨日の時点で私が疑っていたのは咲夜とさとりだったかな。理由はこれまた軽薄。冷蔵庫の件、天子の言っていた事件じゃなくて冷蔵庫から何でも出てくることが判明した件で先述の2人の反応が周りに比べて比較的小さかったことに由来していた。ただ、こんなことで疑う方も疑われる方も納得はできないだろう。今は昨日に比べて少しだけ材料が増えた。

それらを踏まえて今一番引つかかっていること、それはある人物の行動だ。今日の彼女の行動が若干不自然さを帯びていて、さらに彼女の行動を調査していると不思議な現象と対面した。その人物とは勿論……

「私はさとりを疑ってるわ。理由は簡単。鈴仙も言っていた不思議な現象の一つがさとりが元々いた場所で起こったこと、さらに皆とつるまないようになっていること。この2点ね」

説得するような口調で私への疑惑の払拭を試みた。罪悪感に残滓として残るが。しかし、口に出してから自分の内面に染み込むようにしてさとりへの疑惑が広がった。意外とそういうことって多いのかもしれない。

「奇遇だな。私もそう思ってたところだぜ」

魔理沙を初め、私も私もと便乗の雨あられが降り注いだ。自分の意見に賛同を浴びるというのは悪い気分ではない。

「ちよつと待て。一回落ち着こうぜ。さとりを疑つてる奴は？」

「魔理沙が音頭をとつて手を振り上げると、キッチンにいない2人と私を疑つてた3人、それに星以外の全員が手を挙げていた。

「大半、か。まあ、案の定だな」

「慧音が変哲な帽子を挙げていない方の手で整えながら呟いた。彼女の近くにいた水蜜や妖夢も深く頷いていた。

「あれ？　じゃあ星のお姉さんは誰を疑つてるんだい？」

「申し訳ありません、今はまだ何とも……」

星は高貴さと有難さ、優しさがバランスよく含まれている笑顔を濟まなそうに浮かべた。疑っている人がいない、というよりは誰も疑いたくない、といったようなニュアンスを感じ取られた。

丁度その頃に、チルノとメデイスンがそれぞれ小さな皿1つずつ持つてさつきと同じ椅子に再び座った。彼女ら2人とも持つてる皿の上には少量のサラダしかなかった。足りるのだろうか？

「えーつと確か疑つてる人だったっけ？　うーん……じゃあ私は天子かなあ」

メデイスンの発言で案の定天子だった1人だけが顔をしかめた。

「ちよつと。意趣返しのもり？」

「まー、そんなとこかな。だって、他に疑う材料も勿論無いんだもーん。天子だって似たような理由でしょ」

「私はそれなりに芯の通った理由よ！ アンタのは私の理由ありきじゃない！」

天子のちよつとした本気が含まれた激昂にメデイスンは目をパチパチと数回大きく開け閉めした。むしろ、場にいた全員が些か不自然に感じるほどに本気が天子から漏れ出していた。

「あのさ、もしかして私だけが勝手に思っただけかもしれないんだけど、この談義って全員の反応を見るために開かれてるんだよね？ 暗黙の了解みたいにして」

何人かの不思議に満ちた声が重なって聴こえた。私は辛うじて声を口の中で留めることに成功した。円卓に座っている約半数くらいの人数が顔に「嘘でしょう？」と書いてあった。

「お前、よく分かったな。私が誰にも知られずに遂行できると思っただがな」

「それは甘い考えですわ。でも、今の反応を見ると意外に知られてなかったみたいね」

魔理沙と咲夜は平然とメデイスンの意見を肯定し始めた。他に彼女たちの類がいなか全員の顔を見回してみたところ、涼しい顔をしていたのは水蜜と燐、そして予想に反してチルノも同じくしていた。

「え……あの、ちよつと待っててくださいよ！ 私たちに分かるように説明してください！」

妖夢が困惑から脱出して力無く魔理沙に尋ねた。私もだいたいにおいて妖夢と同じことを訊きたかった。

「メデイスンが大方説明してくれたんだぜ。全然判断の材料が無い状況で突然ウラギリモノ探し始めよう、なんて少し、というかかなり不自然じゃなかったか？ 話し合いでなんてもつての外だ。だからお互いをむやみやたらと疑い合つて互いに反応を判断する。まあ、ここでの話し合いが全くの無意味だ、と言つたら割かしそうではないんだがな。というのが、私の魂胆だ。何か質問は？」

ここまで策を巡らせているとは。ちよつとやり過ぎじゃないかな、と思つたのは否めないが石橋を叩いて渡るといふ言葉もあるくらいだからきつと正しい道なのだろう。それより私が今一番気になるのは、チルノの表情だ。至つて冷静、説明を聞いてからも沈着にサラダを静かに口に運んでいるあの態度。てつきりチルノは全然話についていけない、もつとダイレクトに言うなら理解力に乏しいタイプの人種かと思つていたがそうではなかったみたいだ。

「チルノさん、魔理沙さんのやりたいこと知つてたんですか？ ちよつとびつくりです

……」

早苗も私と同じ思考を持っていたようで、チルノにずけずけとその旨を話していた。「甘い甘い。この名前のよく分からない葉っぱよりも甘い。頭から尻尾まで全部分からなかったのさ」

「……その返しは全然予想してませんでした」

全員から安堵と平穩の笑いが生まれた。たった一人を除いて。

「この私が……嵌められたの？」

一人だけ場の雰囲気とあからさまに異なっていた。天子はメラメラと、わなわなと、ビリビリと震えていた。憤慨と屈辱で。

「嵌められたって言い方はちよつと過ぎてるけどね。でも、あれだけ必死に反論されるとやっぱり印象は良くないかなあ」

メデイスンは若干煽ってるようだがつ優しく宥めるような口調だった。それがまた天子の不機嫌という火に油を注いだ。

「何なのよ！ 昨日と言い今日と言い！ 絶対アンタが犯人に決まってるわ！ 今ので明白よ、近いうちに殺してやる！」

円卓を力いっぱい叩き、椅子を殴るように椅子を引き下げて食堂を乱暴に退出した。円卓を叩いた時に、チルノとメデイスンの手元にあった皿が宙に浮いた。その皿にあった野菜をほぼ無心に食べていたチルノもまた浮いた。

勿論、驚愕で。メデイスンは見様によつては勝ち誇つている表情をしていた。

「昨日もこんな光景見たぜ。デジャヴか？」

「私も見たわ。八雲紫と会う度あなつてた気がするけど」

「そういえば霊夢は個室の事件でも天子と一緒にだったな。その話後で詳しく聞かせてくれ」

今までの論議が空虚なものであつたとしても、やはり私が疑われているのだろうか？
魔理沙までもが私を……

「状況が状況だけにこれ以上の話し合いは不可能だな。今回はこれでおしまい、でいいか？」

いつの間にか慧音が場をリードしていたが、先ほどの魔理沙の意図を読み取れなかつたことを考えるとちよつぱりだけ滑稽のようを感じる。

それを号令とするように、以降誰も口を開こうとしなかった。話し合いの時の他人のリアクションを思い出して、咀嚼し、各々で判断を下しているのだろう。チルノ以外は。

